# MILGRAM

脚本集 第一審

1

## ミルグラム監獄内　エスの部屋

薄暗いエスの部屋。
深く椅子に座っているエスと、その膝の上に乗っているジャッカロープ。

ジャッカ「わかったな……お、そろそろ囚人どもが気づく時間だな。準備はできてるな？」
ジャッカ「ミルグラム・第1審開始だ」
ジャッカ「……ってな。さぁ、行くぞエス」

ぴょんとエスの膝から飛び降りるぽふっと間抜けな足音。

エ　ス「……どこへ？」

まだ少しうつろなエス。

ジャッカ「『パノプティコン』。囚人共の部屋を一望できる場所だ」
エ　ス「パノプティコン……」
ジャッカ「記憶が曖昧なんだろ？　道案内がてら色々説明してやるよ」

エ　ス「あぁ、頭に霞がかかっているようだ。……すまない」
ジャッカ「良いってことよ。いつもそうなんだ」
エ　ス「……？　大丈夫だ。仕事に支障はない」
ジャッカ「オッケー。じゃあいくぜ」
エ　ス「あぁ」

顎でドアの方を示すジャッカロープ。

ジャッカ「……ん」
エ　ス「……どうした？」

更に顎でドアの方を示すジャッカロープ。

ジャッカ「……ん!!」
エ　ス「撫でればいいのか？」
ジャッカ「チゲぇよ！　開けろよドア！　見りゃあわかんだろ！」

気づき納得するエス。

エ　ス「あぁ……」

ドアに手をかけるも途中で止まるエス。

エ　ス「疑問なんだが……ひとりでドアも開けられないのになんでそんなに偉そうなんだ？」

ジャッカ「うるっせぇなぁ。開けられないのはオマエの寝室だけだ。他の部屋は俺様用の小さい入口があんだよ……誰が小さいんだコラァ！」

エス「僕は何も言ってない」

エスがドアを開ける音。

## 2 ミルグラム監獄内　通路　エスの部屋前

通路に出た2人。

長くて暗い通路が続いている。

エス「……長い通路だな」

ジャッカ「ここ、お前の寝室が通路の端っこだ。この通路を挟むようにしていろんな部屋と施設があるわけ。全部説明してたキリがねぇから、今日ははぶくけどな」

真正面の小さな扉を見て問うエス。

エス「僕の部屋の向かいは何だ？」

ジャッカ「俺様の部屋だな。許可なく入んじゃねぇぞぉ」

エ　ス「予定はないから大丈夫。それに、見たところ人間が通れる大きさの扉がない」
ジャカ「ふん、それもそうだ」
通路を歩き始める2人。
コツコツとエスの足音が響く中会話をする。

## 3

ミルグラム監獄内　通路

先を行くジャッカロープが部屋を紹介していく。あるきながら会話。
ジャッカ「ここが囚人用のシャワー室。向かい側が倉庫。必要な備品はたいていココ」
エ　ス「囚人用……この通路は囚人も出入りするんだな」
ジャッカ「あぁ。通行を許可する時間やら、シャワーを男女別にするかどうかやら細かい生活のルールはオマエが後で決めりゃあいい」
エ　ス「僕が決めるのか？」

ジャッカ「おう、このミルグラムをどう管理・運営していくかオマエに全部任せてる。地獄にするも天国にするもオマエ次第よ」

ジャッカロープの言葉に何の気無しにうなずくエス。

エ　ス「……わかった」

ジャッカ「なんでか？　とは聞かねぇんだな」

エ　ス「そういうものなんだろう。僕にはこの監獄を管理する義務がある。不完全な記憶の中でも、それだけは覚えている」

その言葉に満足そうに微笑むジャッカロープ。

ジャッカ「……上出来だ」

エ　ス「……なぁ、ジャッカロープ」

ジャッカ「あんだよ」

エ　ス「……もっと早く歩いてくれないと踏んでしまう」

ジャッカ「体のサイズ考えろ！　人間様がウサギに合わせろや!!　……誰がウサギだコラァ!!」

エ　ス「僕は何も言っていない」

ジャッカ「ったくよぉ……。あ、ここが食堂な」

エス「……そういえば誰が食事を用意するんだ？　ここに僕と
お前以外に管理人がいるのか？」
ジャッカ「オレ様が作ってんだよ」
エス「なるほど。……ん？　なるほど？」
予想外の答えに若干うろたえるエス。
ジャッカ「実はオレ様はこの監獄の料理長でもある。和・洋・中
なんでもござれさ」
エス「……ちょっとした疑問なんだがその手でフライパンやら、
包丁やら持てるのか？」
ジャッカ「ぐっっと気合を入れたら持てる」
エス「持てるのか……。その、毛とか入らないのか」
ジャッカ「毛の生え変わり時期はすごく入る」
エス「すごく入るのか……」
話している間に通路の突き当り、大きな扉の前にた
どり着いている。
ジャッカ「おら、馬鹿言ってる間についたぞ。その扉を開ければ、
ミルグラムの中心部パノプティコンだ」

扉を開けるエス。ギギギと重い扉が開く音。

## 4 ミルグラム監獄内 パノプティコン

円形のホールのような空間。

等間隔で扉が存在している。

エス「これがパノプティコン。ドーム状になっているんだな」

ジャッカ「おう。今オレ様たちはこの丸い部屋の北側、12時の位置にある扉から入ってきたことになる」

エス「それぞれの扉が囚人の部屋か?」

ジャッカ「そういうこった。この部屋を時計に見立てると、囚人番号と時刻が一致してるってわけよ。覚えやすくていいだろ?」

エス「なるほどね」

壁にかかっている時計をチラッと見やるジャッカロープ。

ジャッカ「ふむ。まだもうちょっと時間があるな。軽く囚人ども

の紹介をしといてやるよ。……っつってもオレ様もツラしか見てねぇんだけどな」

こつこつと円形の部屋を時計回りに一周しはじめるエスとジャッカロープ。

1時の部屋で足を止める二人。

ジャッカ「まず、1時の位置の部屋。囚人番号1番サクライハルカ。ややこしい名前だが、男だ」

エ　ス「サクライ……ハルカ……」

ジャッカ「根暗そうな顔してやがったな。ま、うまいこと心開かせて色々聞き出してくれや」

エ　ス「ただ、その顔すら本当かはわからないのだろう？」

ジャッカ「フン、よくわかってんじゃねぇか。オレ様たちをあざむく擬態かもしれねぇ。ニンゲンは嘘をつく生き物だからな」

エ　ス「……覚えておく」

歩きはじめる2人。

2時の部屋の位置に。

ジャッカ「次、2時の位置。囚人番号2番カシキユノ。若い女だった。高校生くらいじゃねぇかな」
エ　ス「高校生くらい？　囚人の年齢もわからないのか？」
ジャッカ「囚人のパーソナルなところに興味ねぇからな、オレ様。看守のオマエが把握しとけばいい」

3時の部屋。

ジャッカ「次、3時の位置。囚人番号3番カジヤマフウタ。若くてアホそうな男だ。オレ様こいつ嫌い」
エ　ス「……顔を見ただけなんだろう？」
ジャッカ「ニンゲン、第一印象が9割だよ。俺様に投票権があったら迷わず有罪にしてるね」
エ　ス「そういうものかな」

4時の部屋。
扉に刻まれている文字を読むエス。

エ　ス「囚人番号4番は……クスノキ、ムウ？　女性か？」
ジャッカ「おう。やたら美人の姉ちゃんだ。逆にこっちは無罪にするな。美しい遺伝子は残すべきだ」

足を止めるエス。

エ　ス「はぁ……。そんな欲にまみれた判断基準でいいのか?」

ジャッカ「へっ……じゃあ何を判断基準にするんだ?　ただ法律に照らして裁くんだったらオマエである意味がない」

エ　ス「む……」

ジャッカ「言ったろ、オマエ自身の基準で決めればいいって。それが性や愛でも文句は言わねぇよ。監獄内恋愛を禁止しやぁしねぇからよぉ」

いやらしくニヤつくジャッカロープ。

それを見て少し口をとがらせるエス。

エ　ス「……くだらないな。次は?」

ジャッカロープを置いて歩きはじめるエス。

追いかけるように歩くジャッカロープ。

ジャッカ「へっ。今回の看守さんはウブだこと。囚人番号5番、キリサキシドウ。歳は三十くらいかな。こいつはオレ様に負けず劣らずの男前だな。……色恋目線でいくと、こういう奴が集団に波乱を巻き起こしたりするんだよなぁ」

エ　ス「……（ため息）」
ジャッカロープを無視して歩き6時の位置に。
エ　ス「真南6時の位置。これで半分か」
ジャッカ「ここは囚人番号6番、シイナマヒル。20代前半ってとこかな。……オレ様的にはこれくらいの女が一番好みだな」
下世話なジャッカロープにイラつき、足を止めるエス。
エ　ス「ジャッカロープ。……遊びじゃないんだろ、この仕事は」
ジャッカ「くっくっ……遊びのつもりはねぇよ。この仕事の本質は人間を見ることだ。オマエにもいずれわかる」
エ　ス「……ふん」
釈然としない様子のエス。歩きはじめる。
ジャッカ「囚人番号7番。ムクハラカズイ。おっさんだ。今回の最年長じゃねぇかな。体格的にも、戦闘になったらこいつがナンバーワンだろうな」
エ　ス「……そうだ。囚人に襲われたらどうする？　その、あま

り言いたくはないが、僕の体格で抵抗できるとは思えない」

足を止め、後半少し恥ずかしげに言いよどむエス。

ジャッカ「安心しな。囚人どもはオレ様たち管理者への攻撃はできない。そういう仕組みになってる」

エ　ス「『管理者へ』つまり囚人同士はそうではないと」

ジャッカ「ふん、冴えてるじゃないか。そういうこともあるかもしれない。お前の判決次第じゃな」

歩きはじめ、8時の部屋。

ジャッカ「さ、次は囚人番号8番モモセアマネ。聞いて驚け。なんとランドセル背負った女子小学生だ」

エ　ス「そんな小さな子まで……〝ヒトゴロシ〟だというのか」

ジャッカ「くっくっく、知らねぇけどよ。幼ければ純粋で、無垢で、善良で、ってのもまた思い込みなんだろうぜ。ガキだからって油断すんなよ。囚人共はどいつも俺たちを食っちまうバケモノの可能性があるんだぜ。だからこそ……」

エ　ス「だからこそ」

ジャッカロープの説教をさえぎるように言葉をかぶせるエス。

エ　ス「それを見極めるのが看守の役目だというのだろう。まるで保護者だな、ジャッカロープ」

ジャッカ「へぇへぇ。わかってんなら、構わねぇよ」

9時の部屋の位置。

ジャッカ「次、囚人番号9番。カヤノミコト。男だ。特に特徴がなくて言うことねぇな。量産型ってかんじ」

エ　ス「逆に気になる」

ぼそりと小声でつぶやくエス。

10時の部屋の位置で足を止めるジャッカロープ。

ジャッカ「最後が囚人番号10番、ユズリハコトコ。こいつは要注意だな。見るからに只者じゃなさそうな女だった」

エ　ス「これで10人か」

ジャッカ「これで囚人紹介は終わりだな。ま。あとは実際話して確かめろよ」

なにかに気づいたエス。

エ　ス「ジャッカロープ」

ジャッカ「ん？」

エ　ス「あそこは？　11時の位置。あの部屋には囚人はいないのか？」

11時の部屋に歩いていくエス。

ついていかないジャッカロープ。

エ　ス「他の部屋の扉よりも古いな錆びついている……外側からの錠もない」

ジャッカ「あぁ、そこはいい。何もない」

感情の乗らない返しをするそっけないジャッカロープ。

エ　ス「……それは」

エスの声を遮るようにゴーンと鐘のなる音。

パノプティコンの中に強く反響する。

エ　ス「何の音だ……」

ジャッカ「時間だな。……囚人共が目覚めるぞ。ついに顔合わせっ

てわけだ」

うろたえるエスに向き直り、真剣なトーンで話すジャッカロープ。

ジャッカ「いいか、オマエ自身が持つ不安や戸惑いや疑問はすべて殺せ。お前は看守なんだ。おそれるな。囚人共にとっての権威と恐怖であれ」

エ　ス「……言われるまでもないよ。ジャッカロープ。……僕はミルグラムの看守だ。僕にはそれしかない」

ジャッカロープに背を向けるエス。

エ　ス「それに、実は今少しだけ楽しみなんだ。ここに集められた囚人たちと出会うのが。そして彼らの罪を知るのが」

ジャッカ「……」

エ　ス「お前の言う通り、僕は僕の意思で彼らの罪を暴こう。……僕はどう感じるんだろう。赦したい、赦したくない、どう思うんだろう」

自分の掌を見つめるエス。

エ　ス「僕は、彼らを通して、僕自身のことも知りたいんだ」

ジャッカ「……エス」

エスの背中を見つめていたジャッカロープ。

顔を下げ、冷めた声色でつぶやく。

ジャッカ「哀れなことだ」

突如ガシャンガシャンと囚人の部屋の錠が次々に開いていく。

ジャッカ「……来るぞ。ぶちかましてやんな」

エス「あぁ。看守としての初仕事といこう」

それぞれのドアが開き、囚人たちがパノプティコンへ踏み込んでくる。

囚人たちの足音が響く。

エス「ごきげんよう、囚人諸君。僕の名前はエス。この監獄の看守をしている」

「ここは監獄ミルグラム。お前たち10人の罪を裁くために存在する」

「僕がお前達について知っていることは少ない。知っているのは、お前たち全員『ヒトゴロシ』だということだけ」

「他のことはこれからゆっくり教えてもらうさ。改めて……ようこそミルグラムへ。良き監獄生活を」

# 01

# 1 ミルグラム監獄内　尋問室

薄暗い尋問室の中。
不安そうに椅子に座っているハルカ。
扉の外からコツコツと足音。
ハルカ「……ぁ」
ガシャンと乱暴に扉が開く。
ハルカ「……っ」
びくっと怯えるハルカ。
扉を開けたエスは気にすることもなく、座っている
ハルカの前に立つ。
エ　ス「さて、尋問を始めよう。囚人番号1番、ハルカ」
ハルカ「は、はい……。ご、ごめんなさい」
エ　ス「……?　何を謝ることがある?」
ハルカ「あ、あ、いや……ごめんなさい」
ハルカの態度を不思議がりつつも話を続けるエス。
エ　ス「ふむ。ミルグラムはお前たち囚人の罪を明らかにし、適

切な判断をくだすために存在している。そのためにいくつか話をしよう」

ハルカ「はぁ」

エ　ス「なに、尋問といっても現段階では手荒な真似をするつもりはないから安心しろ。ちなみに、虚偽も黙秘も認めている」

ハルカ「きょぎ、もくひ……」

エ　ス「言いたくないことは言わなくても構わないし、嘘をつきたければついても構わない」

エスの言葉に意外そうに口を開くハルカ。

ハルカ「そうなん、ですか……」

エ　ス「あぁ、ミルグラムはお前の記憶から直接歌を取り出すからだ。僕はそれを見てお前の罪を判断する」

ハルカ「……」

エ　ス「つまりお前がどんな主張をしようと大きな問題はない。むしろ〝黙秘をした〟〝嘘をついた〟ということ自体がお前が自分の罪に対してどういう意識を持っているかを

「示すことになる」

ハルカ「はぁ……」

エス「そもそも、罪に対して反省しているかどうか、それを判決の基準にするかすら僕次第なのだがな。……わかるな？」

少し困ったように考えるハルカ。

ハルカ「えっと……わかりません」

エス「は？」

ハルカ「え？」

エス「ん？」

ハルカ「あ、え、あの何言っているかわかりませんでした。むずかしくて」

エス「……うん？」

ハルカ「あの、ごめんなさい僕あたまがあまり……」

軽く頭痛を覚えながら、言葉を続けるエス。

エス「……ハルカ、お前歳はいくつだ」

ハルカ「えっと17だったと、思います」

エ　ス「……思います?」
ハルカ「あ、いや、自分の年齢に興味なくて……ごめんなさい
……」
エ　ス「……調子狂うな」
おもわずこぼすエス。
エ　ス「……続けようか。ミルグラムでの生活はどうだ?」
ハルカ「あ、あの最初はわけわからないしちょっと怖かったんで
すけどみんな良い人なんで、大丈夫です……」
エ　ス「みんな、とは。他の囚人連中か?」
ハルカ「あ、はいあの、ユノさんとかマヒルさんとか優しく、し
てくれます……」
少し考えたのち、改めてハルカをじっと見つめる
エス。
エ　ス「……少し興味があるな。ハルカの目に他の囚人はどう
映っている」
ハルカ「あ、え、いや。ぼ、僕なんかがみんなのことを喋るの、
わるいです」

エ　ス「安心しろ。この部屋でのことを他の四人に漏らすことはない」

ハルカ「えっと……は、はい……何を話せばいいんでしょうか……」

エ　ス「そうだな。誰とよく話すんだ？」

ハルカ「あ、よく話しかけてくれるのはユノさんと、マヒルさんと、えっとミコトさん……フータくんも、少し怖いけど、かまってくれます。ムウさんとも、たまに話します……」

エ　ス「ふむ、カズイやシドウは？」

ハルカ「あ、あの大人なんで、少し怖いんですけど二人とも優しい人だと思います……」

エ　ス「コトコは？」

ハルカ「あ、ちょ、ちょっと怖いです」

エ　ス「まぁ予想通りだ。あとは名前が出てないのはアマネか」

アマネの名前が出て、少しトーンが落ちるハルカ。

それとは裏腹に落ち着かず細かい手の動きが増える。

ハルカ「ア、アマネちゃん……」

エ　ス「どうした」

ハルカ「に、苦手なんです……あれくらいの、子供……あ、あ、アマネちゃんは良い子なんですけどい、いや、い、いやなことを、思い出すんで……」

顔を下げ、頭を抱えるハルカ。

エ　ス「大丈夫か？　随分顔色が悪いな」

ハルカ「そもそも、あまり僕は人と関わっちゃいけないんです……し、囚人のみんなとも……勘違いしちゃだめなんだ……」

エ　ス「なぜだ。好きにすればいいじゃないか。僕は他者との関係の中でこそその人間の本質が見えると考えている」

バッと顔を上げ、エスに対して前のめりになるハルカ。

ハルカ「かっ！……看守さんにも言えることなんだ」

エ　ス「僕にも？」

ハルカ「……あまり僕に近づかない方がいい。生まれつき人を不幸にすることは得意なんです……。僕を知ろうとすれば

するほどきっと看守さんも不幸になる……」
エ　ス「ハルカ……」
ハルカ「だって、だって……あぁ、ごめんなさい、一人でずっと
しゃべって……」
ハルカ「い、いつだってそうなんだ。僕が、僕は、ただ普通にし
てるだけなのにぜんぶ、だめにしてしまう……」
エ　ス「……続けろ」
ハルカ「看守さんだって、みんなだって僕のことを知ったら……
僕のしたことをすべて知ったら」
ハルカの目に浮かぶ涙。
ハルカ「僕を、見捨てるに決まってる……」
頭を抱え、震えるハルカ。
ハルカ「ぼくは身勝手な〝ヒトゴロシ〟だから……」
しばらくハルカを見つめたあと一息をつき話始める
エス。
エ　ス「……ハルカ」
ハルカ「はい……」

エ　ス「顔をあげろ」
ハルカ「はい……」
エ　ス「……ふんっ！」
ハルカ「ぎゃん！」
　　　ハルカの顔面を思いっきりビンタするエス。
　　　思い切り後ろに椅子ごと倒れるハルカ。
　　　床に尻もちをつき、頬を抑えるハルカ。
ハルカ「い、いたい……な、何をするんですか……」
　　　ハルカを見下ろし、冷たく言い放つエス。
エ　ス「僕は看守だ。今のは囚人に対しての教育的指導だ。赦される」
ハルカ「うっ……」
　　　ハルカの襟首をつかむエス。
　　　顔をぐっと近づけ威圧的に話しかける。
エ　ス「いいか、よく聞け囚人番号1番。何度でも言おう、僕は看守だ。お前の本性を知るのが僕の仕事だ。お前が何者だろうと、お前がどんな非道を働いていようとすべて見

届け判断するのが僕の仕事だ」

静かに怒りを押し殺しながら言葉を続ける。

エ　ス「それを言うに事欠いて、見捨てるだと……？　あまり僕をナメるなよ……」

ハルカ「あ……あぁ……」

エ　ス「お前の罪を知り、お前の罪を赦すか赦さないか判断し終えるまで、お前は僕の管理物だ。逃してもらえるなどと思うな」

ハルカ「か、看守さん……」

エスの威圧感に呆然としていたハルカ。自然と口角があがっていく。

ハルカ「ふ、うふ……」

エ　ス「……ちょっと待てハルカ。……何をニヤニヤしている」

ハルカ「えっ……あ、あ、ごめんなさい。きもちわるいですよね……へ……へ……」

エ　ス「きもちわるい」

掴んでいた襟首を離すエス。

床に正座するハルカ。

ハルカ「あっ、あっ……ちがくてへ、へんなはなしなんですけど
　　ちょっと、うれしくて……」
エ　ス「……嬉しい？」
ハルカ「はい……」
エ　ス「おかしな話だな。僕が言うのも難だが監禁され、拘束さ
　　れ、こうして尋問されている。この状況に対して怒りや
　　恐れを覚えるのが自然だろう」

顎に手を当て考える様子のエス。

エ　ス「……そういえばお前は最初からずっとそうだ。ふさぎ込
　　んではいるがミルグラム自体への混乱を感じない。その
　　点はフータやムウの反応の方が腑に落ちるというものだ」
ハルカ「そ、そうですね……フータくんはすごく怒ってますね
　　……こわいじゃ、じゃなくていや、あの僕はこのミル、
　　グラムでしたっけ。何のためにあるのかとか、よくわかっ
　　てないんですけど看守さんが自分に興味を持ってくれて、
　　色々聞いてくれるのは、なんだか嬉しかったりします

……」

エ　ス「……」

ハルカ「そ、それがおしごとでも僕のやったわるいことをあきらかにするためだったたと、しても……です」

エ　ス「……ふむ」

ハルカ「……」

エ　ス「変なやつだな」

ハルカ「あう……」

正座のままびくびくしているハルカ、遠い目をするエス。

エ　ス「一人目から特殊すぎる。お前は七人目くらいでくるべきだ。この仕事の大変さを今はっきり理解した」

ハルカ「ご、ごめんなさい……」

エ　ス「ふむ。まぁ良い。反抗的な囚人よりはいくらかマシだな……」

ハルカ「……ほっ」

安堵のため息をこぼすハルカ。

エ　ス「ただし！　あまり勘違いをするなよ、ハルカ。僕はお前と仲良くしたくて話を聞いているわけではない僕の目的はあくまでお前の犯した罪を知ることだ。お前が何をしたのか、なぜ〝ヒトゴロシ〟となったかを知るためだ」

ハルカ「は、はい……」

エ　ス「まだニヤニヤしている」

ハルカ「ごっ、ごめんなしゃい」

　頬を手で抑えて笑みをごまかすハルカ。

エ　ス「緊張感のない男だ。僕がお前を赦さないと判断するだけでお前の身にどんなことが起きるか……」

ハルカ「何が、おきるんですか？」

エ　ス「……」

　突如出来た無言の時間にあわてるハルカ。

ハルカ「……えっと」

エ　ス「さぁな。お前は考える必要はない……きっと僕にもな」

ハルカ「……」

エ　ス「そうだ、あとひとつ言いたいことがある。お前は自分が

身勝手なヒトゴロシだから周りと関わってはいけないと
いったな」

ハルカ「はい……」

エ　ス「囚人どもは皆〝ヒトゴロシ〟だ。何を遠慮することがあるあいつらにくらい好きに振る舞えばいい」

ハルカ「……えっと」

わずかに口角のあがるエス、

エ　ス「お前にもわかりやすく言おうか。お前ら全員ダメ人間だ。だから気にするな」

ハルカ「……は、はは……それも、そうですね」

エ　ス「ふっ」

突如部屋にある時計から鐘の音がなる部屋の構造が変化していく。

ハルカ「え……」

エ　ス「おしゃべりの時間は終わりのようだ。恐れることはない。ただお前の記憶をのぞかせてもらうだけだ」

怯えるハルカの肩に手を載せるエス。

エ　ス「囚人番号1番、ハルカさぁ。お前の罪を歌え」

# 02

薄暗い尋問室の中。

のんきに鼻歌を歌っているユノ。

ユ　ノ「～♪」

扉の外からコツコツと足音。

ユ　ノ「お。来たかな……ふふ」

イタズラっぽく笑うユノ。

まもなくガシャンと乱暴に扉が開く。

エ　ス「囚人番号2番ユノ。尋問を始め……」

部屋の中にユノが見当たらず、あたりを見回すエス。

エ　ス「……？　どこにいった……」

ユ　ノ「わっ!!」

扉の裏に隠れていたユノ、エスの後ろから驚かす。

動じないエス。

エ　ス「……何をしている」

ユ　ノ「あれ～。看守さん、リアクションうっすいなぁ。もっと

驚いてよ～」

エス「……さっさと座れ。尋問を始める」

ユノ「は～い……」

椅子に座るユノ。

目の前に立つエス。

エス「ミルグラムはお前たち囚人の罪を明らかにし、適切な判断をくだすために存在している。そのためにいくつか話をしよう」

ユノ「おっけー。話そ話そ」

エス「……まず」

言いかけたエスを遮る楽しげなユノ。

ユノ「まず自己紹介とかしとく？ カシキユノ。18歳。高校生。9月2日生まれの乙女座のO型」

エス「……ストップ、ユノ」

ユノ「なになに？」

エス「質問はこちらからする」

ユノ「どうぞどうぞ～」

咳払いをし、続けるエス。

エス「ンン……囚人としてミルグラムに囚われて数日というところか。率直に、どうだ？　監獄生活は」

厳粛な雰囲気を作ろうとするエスだが、ユノは取り合わない。

ユノ「んー？　意外と楽しいよ。家族がどうしてるかなぁって心配はあるけど……不思議体験って感じで」

エス「楽しい……か……」

ユノ「そうだね、他の囚人の人たちもみんな面白いし、まだ色々探り合いって空気もいいね。そういう時期の人間観察ってやっぱり楽しいよね～？」

エス「ユノ」

ユノ「はいよ？」

まだ喋りそうなユノを制止するエス。

エス「……緊張感がなさすぎる。尋問だと言っているだろう」

ユノ「あぁ、看守さんったらムード大切にするタイプだ」

エス「最低限は。お前の罪を許すか、許さないか、判断するた

めの貴重な場だからな」

睨みつけるエスのことを意に介さず、
笑顔で続けるユノ。指を3本立てて見せる。

ユノ「緊張感がない理由は3つありま〜す。……聞きたい？」
エス「……それを解決すれば真剣に取り組むんだな？」
ユノ「ん〜。まぁ、そうなるかな？」
エス「話してみろ」
ユノ「3000円になりま〜す」
エス「いいから話せ」
ユノ「けち〜……まぁいいや。じゃあひとつめ。看守さんの見た目が全然怖くなくてむしろ可愛いから」
エス「……はぁ？」

思いもしない回答に拍子抜けするエス。

ユノ「おかしいでしょ。看守なのに。あたしと同じくらいの歳じゃない？　むしろちょっと下くらい？」
エス「……知らん」

あからさまに不機嫌になるエス。

ユノ「ほらほら、無理でしょ〜。そんな可愛い顔で緊張感持てなんて」

エス「……あぁ？」

　普段以上に威嚇するように睨みつけるエス。

ユノ「あはは、眉間にシワ寄せても無駄だって」

エス「……大変不服で不愉快だ！　それに反論もあるぞ」

ユノ「ほうほう？　聞きましょう？」

　ビシッとユノを指差すエス。

エス「僕が屈強な大男だったとして、暴力をもって支配しようとしたところでお前の態度が変わるとは思えないな」

　エスの指摘に少し驚いた顔のユノ。

ユノ「……たしかに！　そうかも」

エス「だろう？　それはお前自身の気質の問題だ。よって僕の見た目は関係ない。まったく関係ない」

ユノ「めちゃくちゃ気にしてんじゃ〜ん。まぁいいや。じゃあ第一問クリアってことで」

エス「いつの間にクイズになった？」

ユノが指を2本立てて見せる。

ユノ「あたしが緊張感のない理由ふたつめ。先に尋問から帰ってきたハルカがニッコニコしてたから！」

エス「あぁ……」

頭を抱えるエス。

エス「それは僕のせいじゃない……」

ユノ「おかげでよっぽど楽しいことが待ってるんだと思って期待してたんだけどなぁ～」

エス「お前が帰るときは絶対に暗い顔で帰れよ」

ユノ「ねぇねぇ。ハルカと何話したの～？　あの子をあんなにニコニコさせるなんてすごい手腕じゃない？」

エス「僕は尋問での会話の内容を漏らすことはしない。だが、そうだな……僕が何をしたか教えてやろう。思いっきりビンタをお見舞いしてやった」

ユノ「わーお！」

ニヤニヤするユノ。

ユノ「それでニコニコで帰ってきたのか。そりゃハルカが変態

エ　ス「なんだか気づかないうちに、お前のペースに巻き込まれ
ている気がする……」

笑顔を崩さないままのユノが、少し冷たく言い放つ。

ユ　ノ「みっつめ。看守さんに人を赦す・赦さないなんて決め
れっこないと思っているから」

ユノの顔は笑顔のままだが、空気だけが変わって
いる。

ユノの言葉に眉をひそめるエス。

エ　ス「……聞き捨てならないな。僕の能力を疑問視していると
いうことか？」

ユ　ノ「あぁ、違う違う。看守さんがどうこうってわけじゃないよ」

エ　ス「……詳しく聞かせてもらおうか」

不愉快を隠せないエスに対して、少し冷めた様子の
ユノ。

ユ　ノ「まぁ……システムを聞いたときからずっと思ってたんだ
よ。ここ、看守さんが有罪無罪決めるんでしょ」

エ　ス「そうだな」
ユ　ノ「看守さんの好き嫌いでしかないでしょ、それ」
エ　ス「………」
ユ　ノ「あんまり詳しくないけどさ、日本って法治国家ってやつでしょ？　法律以外で良いとか悪いとか決めたらおかしくなっちゃうでしょ？」
エ　ス「ふむ」
ユノ「例えばニュースとかさ〜。不倫とか不適切発言とか不謹慎とかで騒いでるでしょ？　同調した人たちも叩き始めるでしょ？　……バカだなぁって思わない？　法律以外で人が人を罰するなんてキリがないよ」
心底つまらなそうなユノ。
エ　ス「……一般論になるが法律も人が決めたものだ。すべての人間が納得する妥当性を得られるものではないだろう」
ユ　ノ「それ。自分が納得したいからって、無関係の他人に干渉してくる人が嫌いなんだよねー。それってマス……あー、ただ自分が気持ちよくなりたいだけじゃん？……その人

エス「ユノ……」
ユノ「あたしがどんなに寒い思いしてても、なーんもあったためてくれない人たちだよ」
　どんどんトーンの堕ちていくユノ。
　そんな自分にはっと気づいて笑顔に戻る。
ユノ「へへ、話それちゃった！　えーと、何が言いたいかというとね」
エス「結局僕次第だと……」
ユノ「そう。結局もう好みじゃん？　まぁ別に良いと思うんだけど、潔くて！　でも、看守さんがどう思うかなんてあたしにはどうしようもない。だから取り繕う意味がない。普段どおり楽しく過ごしているってわけ！」
　あっけらかんとしたユノに、ため息をつくエス。
エス「……なかなかクセモノだな、お前も」
ユノ「そう？　普通じゃない？」
エス「良いだろう。お前がお前らしくいるように、僕も看守ら

しくやらせてもらう」

バッとコートを翻し、

エス「ユノ。お前自身は自分の罪についてどう考えているんだ？」

ユノ「え？」

エス「お前のその感性をもってすれば何故自分がここに入れられたかはわかっているんだろう？」

少し考えたのちに、口を開くユノ。

ユノ「……まぁ『ヒトゴロシ』呼ばわりされそうなことは一件ほど」

エス「よろしい。では、お前はお前の罪をどう感じる？ 赦されるべきものか？ 赦されざるものか？」

少し考え込むユノ。

ユノ「んー……」

あきらめたようにパッと顔をあげる。

ユノ「……さぁ？ わかんない。考えるのめんどくさいかなぁ」

エス「考えろ」

ユノ「うーん、ぶっちゃけ看守さんが赦さないなら赦さないでいいよ」

エス「赦されたいとは思わないのか?」

ユノ「必死で謝ってまでは別にいいかな。自分のしたいことをした結果だから」

エス「罪の意識はないのか?」

ユノ「どうかな? それも考えるのやめちゃった」

エス「……適当だな」

ユノ「……世の中が真面目すぎるだけだよ」

問答を終え、納得したようなエス。

エス「ユノ、お前はふざけているように見えて頭の良い人間だ」

ユノ「……それはどうも? 買いかぶりだけどね」

エス「だが、それゆえか諦観している。自分にも、人間にも、社会にも。すべてを悟って冷めた顔をしているな」

エスの言葉にあからさまに不機嫌になるユノ。

ユノ「……へー、なに。お説教? 精神論系のやつ? 一番嫌いだよ?」

エス「くくく……」

わずかに微笑むエス。

エス「へらへらと空虚な言葉を吐いているお前より、今のイラついたお前の方がずっと好ましい」

ユノ「……え?」

エス「冷めたままでいい。ごまかさなくていい。僕の前ではな」

突如部屋にある時計から鐘の音がなる部屋の構造が変化していく。

ユノ「部屋が、変わっていく……」

エス「尋問はこれにて終了。ここからはお前の記憶から生み出される心象を覗かせてもらう」

ユノ「……歌で引き出す、って言ってたやつ?」

エス「そうだ。お前の冷めた心も、適当な言葉も、何故そう至ったかも……すべて僕が突き止め、受け止めてやる」

ユノ「看守さん……」

エス「隠し事は不可能。ゆえに何も取り繕う必要はない。お前はお前のままでいればいい。ありのままのお前を、僕が

身勝手に判断してやる。……それがミルグラムだからな」

ユ　ノ「なぁに、そのめちゃくちゃな理論……」

呆けていたユノ、目を閉じ微笑む。

ユ　ノ「でも、そうだなぁ。想像してみるとそれは……。ちょっとだけ……あったかいな」

ユノの肩に手を載せるエス。

エ　ス「囚人番号2番、ユノ。さぁ。お前の罪を歌え」

03

# 03

薄暗い尋問室の中。

フータ「ふぅー……ふぅー……」

椅子に座っているフータ。止まらない貧乏ゆすり。
気持ちを押さえつけるように、荒く息をする。

フータ「……くそが！」

激しく床を蹴りつけるフータ。

エ　ス「……随分な荒れ様じゃないか。囚人番号3番、フータ」

いつの間にか尋問室の入口にエスがいる。
一瞬の驚きの後怒りに震えるフータが口を開く。

フータ「……誰のせいだと思ってんだクソガキが……」

エ　ス「僕は看守だ。言葉遣いには気をつけろ」

フータ「ナメんじゃねぇぞっ……こんなところに連れてきて偉そうにしやがって……！」

エ　ス「どうした？　震えているぞ」

フータ「やってやる……やってやるよ……っ!!」

椅子から立ち上がり、エスに向かって走るフータ。

エ　ス「！」

フータ「うぉおおお!!」

エスに殴りかかろうとするが、ギリギリで見えない壁にぶつかったように拳が止まる。

フータ「な、なんだこれ……見えない壁がある……」

エ　ス「ほう、理屈はわからないがジャッカロープが言っていたのはコレか。〝囚人から看守への攻撃はできない〟」

フータ「………な、なんだっつうんだよ。現実じゃねぇのかここは……」

気が抜けてぺたりとへたり込んでしまうフータ。

エ　ス「無害とはいえ、感心しないな。看守への攻撃行動、とても悪印象だ」

フータ「こ、こんなふざけた場所へ閉じ込めた奴が何言ってやがる！　立派な正当防衛だ！」

決死の形相のフータを見て思わず、笑みがこぼれるエス。

エース「……フ、フフフ……」

　　笑い出したエスを見て、馬鹿にされた怒りと恐怖が

　　入り交じるフータ。

フータ「な、何を笑っていやがる！」

エース「いや、すまない……こっちの話だ」

フータ「な、何なんだテメェ……」

エース「まぁ一旦座れ、フータ。尋問を始める」

フータ「……」

　　戸惑うフータ。

エース「どうした？　腰が抜けて立てないか？」

フータ「ばっ、バカにすんじゃねぇ！」

　　立ち上がり、ふてぶてしくドカッと椅子に座る

　　フータ。

フータ「そもそも俺は自分が囚人だなんて認めてねぇ！　こんなワケわかんねぇ場所に連れてくるなんてジンケン侵害だ！」

エース「自分を囚人だと認めていない、か」

フータ「当たり前だ！　ムジツの人間を拘束して監禁するなんざ、テメェの方がよっぽど犯罪者じゃねぇか！　他のヤツらはなんでか素直に受け入れてやがるが、俺はごまかされねぇぞ」

エ　ス「それはおかしいな。お前らは全員『ヒトゴロシ』だと聞いている」

フータ「……しらねえ。誰が言ってんだそんなこと」

　腕を組み、目をそらすフータ。

エース「思い当たるフシもないと」

フータ「当たり前だ。名誉キソンだろそれ」

エ　ス「しかしヒトゴロシという言葉が出た瞬間に腕を組みだしたな。これ以上踏み込んでほしくないか」

フータ「は、はあ？」

　慌てて腕をほどくフータ。

　構わず推理を続けるエス。

エ　ス「囚人ではない、と僕に殴りかかるほどだ。日本の法律を犯していない、という自信があるんだろう」

フータ「そ、そういってんじゃねぇか」

エ　ス「しかし、『ヒトゴロシ』には反応した。立件はできない。
　　　犯罪ではない。ただ……人は殺した……」

フータ「………」

エ　ス「目をそらしたな」

　　　こくん、と息を呑むフータ。

フータ「……はん、バカバカしい。的外れだぜ」

エース「話し始める前に唇を舐めたな。緊張している証拠だ。嘘
　　　を付き慣れてないのか?」

フータ「……! いい加減にしろテメェ!!」

　　　椅子を倒し、立ち上がるフータ。

フータ「……ふーっ。ふーっ」

　　　殴りかかろうとするが思い出し、止まる。

エ　ス「頭に血が昇ると、暴力が無意味だということまで忘れて
　　　しまうのか?」

フータ「……汚ねぇぞ、てめぇ……」

エ　ス「ちなみに、教えといてやろう。しぐさや反応で心理が読

めるなんてことは、ありえない。それらしい話に簡単に
騙されないようにな」
フータ「こ、こ、こいつ……」
あまりの怒りに唇を震わせるフータ。
エ　ス「残念ながらお前の言う人権侵害も、監禁も、名誉毀損も
ミルグラムではまったく問題にならない。ここはそう
いった理の外にある」
フータ「……そんなこと、認められっか……」
エ　ス「自分の立場をわきまえろ。何を言おうとお前は『ヒトゴ
ロシ』の囚人だ。決して逃げられない。お前に判決がく
だるまではな……」
椅子に座り直すフータ。
気が抜けたのか、顔を手で覆う。
フータ「くだらねぇ……。俺は殺してねぇ……殺してねぇんだ
……」
エ　ス「……ふむ」
興味深そうにフータの様子を眺めるエス。

フータ「殺してねぇ……。殺してねぇ。まだ……」
エス「フータ」
フータ「ぁんだよ……」
エス「先に述べたミルグラムの性質上、お前の『ヒトゴロシ』も、今の時点では問題にはならない。僕はそのことでお前を責める気もない。一旦落ち着くと良い」

　エスの言葉を反芻し、ごくりと生唾を呑むフータ。

フータ「……は、ははっ……殺してねぇっつうの」
エス「どちらでもいいさ。いずれ、ミルグラムの力でわかる問題だ。お前の心象を覗くことになるからな」
フータ「プライバシーの侵害だろ……。フザけんなよ……」
エス「お前にとっては好都合だろう。本当に人を殺していないんだったらそれを証明できるんだ」
フータ「……そうだけど、よ……」
エス「安心しろ。ミルグラムは……まぁ、僕もかな。別にお前の敵じゃない。たとえ法律を犯していても、人を殺して

いてもミルグラムで赦すと判断されれば赦される。ある意味、フラットだろう」
フータ「………」
エス「まぁ、お前の味方というわけでもないけどな」
小さくつぶやくエス。
少し落ち着いた様子のフータ。
フータ「ふぅーー……」
エース「落ち着いたようだな」
フータ「現状どうしようもねぇからな。出口は見当たらねぇし、力づくでも通用しねぇときたらな……」
息を整えたのちエスに向き直るフータ。
フータ「おい、エス」
エス「言葉遣いに気をつけろと言ったはずだが」
フータ「うるせぇ、どうせ俺より年下だろ」
フータの物言いに呆れるエス。
エス「……やれやれ、野蛮人め」
フータ「ここはなんなんだよ。何の目的で俺たちを捕らえてんだ」

エース「答えるつもりはない。お前たちはただ監獄で生活をして
　いればいい」
フータ「……おい、囚人だからってナメんなよ。刑務所の中の人
　権侵害とか、今どき問題になってんのしらねぇのかよ！」
エース「なんだ、囚人だということは認めたのか？」
フータ「言葉のアヤだバーカ！」
　取り合わないエス。
エース「こちらからの質問をするぞ。監獄内の生活はどうだ？」
フータ「どうもこうもねぇよ。スマホもＰＣもねぇし。現代人か
　らネットワークを奪うなんてどうかしてんじゃねぇのか」
エース「他の囚人との関係性はどうだ？」
フータ「別に……。でも変なヤツらだよ。なんでか落ち着いてる
　ヤツも多い。こんな状況だっつうのに……」
エース「ふむ」
　話し出すと止まらなくなるフータ。
フータ「特に気に食わねぇのがシドウとカズイのおっさんコンビ
　だな。この緊急事態だっつうのに。年長者のくせにノン

キにしやがって頼りねぇたらありゃしねぇ」
エース「そうか」
フータ「ま、ハルカもミコトも全然だけどな。俺が引っ張ってい
かなきゃなんねぇ」
エ　ス「ふぅん……」
フータ「そもそもオンナは頼りにしてねぇしな。代表してガッツン
と言ってやるよっつって、今回も俺が来てる訳よ」
エ　ス「あぁ、それであんなに興奮してたのか。しかし、代表の
割にやけに震えていたな」
エスの言葉に少し言いよどむフータ。
フータ「いや、それは、ユノのヤツが……尋問室でとんでもねぇ
暴力を受けたってて言ってたからよ。武者震いってやつ
だよ……！」
エース「ユノ……律儀にやってくれたんだな」
フータ「なんか言ったかよ」
エ　ス「特に何も」
リラックスした様子のフータを見つめるエス。

エ　ス「しかし、よく喋るようになったじゃないか」

フータ「は？　オマエが質問してきたんだろうが」

エ　ス「最初はよっぽど怯えていたのだろうな。先制攻撃することで、それを誤魔化す。そうして自分を守ってきたのだな」

エスの言葉に、ピリつく空気。

フータ「……あぁ？　ケンカ売ってんのかよ……」

エ　ス「僕がお前を判断するために必要な評価だ。気を悪くするな」

フータ「おいおいおいおい！　偉そうに人を評価してんじゃねぇぞ！　違法行為だらけのヤツがよ！」

フータ「ここを出たら絶対に訴えてやっからな！　お前も！　ただで済むと思うなよ！」

エース「ふぅん」

フータ「俺は悪いやつは許さねぇ！　このミルグラムとかいう場所も、絶対に潰してやる！」

フータの言葉に目を丸くするエス。

エ　ス「僕が〝悪いやつ〟か。その発想はなかった。ではフータ、

お前は正義か」

フータ「たりめぇだろ！　悪をぶっ潰すのが正義だ」

考え込むエス。

エース「……正義が、人を殺したのか？」

フータ「……ッ！　殺してねぇ！」

エース「では思考実験だ。どう思う。正義のための殺しは赦されるか？」

フータ「……赦される……。赦されるに決まってる……」

思考に没頭するエス。

エ　ス「興味があるな……。果たして、正義は赦されるのか、善悪、罪、そこに因果関係はあるのか」

フータ「おい、何ぶつぶつ言ってやがる」

突如部屋にある時計から鐘の音がなる部屋の構造が変化していく。

フータ「な、なんだ！　何が起きてやがる!?」

エース「……時間か。見せてもらうよ、お前の正義」

フータ「歌を抽出するってやつか。けっ、好きにしやがれ……」

04

エ　ス「そうさせてもらおう。何か言い残したことはあるか？」

フータ「言い残したことね……おい、エス」

エ　ス「なんだ？」

フータ「なんで笑ってやがった？」

エ　ス「ん？」

フータ「最初の方！　こっちの話だ、とかいってはぐらかしてただろ！　ああいうのモヤモヤして気持ち悪いんだよ」

エ　ス「あぁ……」

エスの顔に笑みが浮かぶ。

エ　ス「あまりに囚人らしい囚人だったもので、正直、少し嬉しくなった。おかげで、いつもよりはりきって虐めてしまったかもしれないな」

フータ「はぁ～～～～！？」

エ　ス「楽しかったよ、ありがとう」

フータの肩に手を載せるエス。

エ　ス「囚人番号3番、フータ。さぁ。お前の罪を歌え」

# 04

薄暗い尋問室の中。
さめざめと泣くムウの声が響いている。
椅子に座っているエスがイラつき貧乏ゆすりをしている。

ムウ「……っ……ひっく……ひっく……」
エス「はぁ……」
呆れた様子で見ながら、ため息をつくエス。
ムウ「ぐす……っ……うう……」
エス「おい、いつまで泣いている……囚人番号4番ムウ。尋問が始められないだろう」
ムウ「……尋問って何……絶対ひどい目に合うんだ……やだ……」
エス「そんなことはしない、と何度も言っているだろう。もう5分経っている、時間は有限なんだぞ」
ムウ「ぐすっ、信じられるわけないもん……こんな変なところ

に連れてくる人が……変なことしないわけないもん」

頑として聞かないムウに頭を悩ますエス。

エス「気持ちはわからんでもないが……話を聞くだけだ。お前の罪を判断するための参考にな」

ムウ「……本当に話だけ？」

エス「あぁ。それが僕の方針だ。暴力を用いての拷問や脅迫などはするつもりはない。僕なりにきちんとお前らのことを知りたいからな」

ムウ「………」

エス「……いいな」

エスの瞳を見て、ゆっくりと口を開くムウ。

ムウ「……楠……夢羽。16歳。あと何を言えばいいの……」

エス「ふむ。……少し気になっていたんだが、その顔だち、ハーフというやつか？」

ムウ「うん……ダブル。ママがフランスの人。日本生まれ日本育ちだけどね……」

エス「ふむ。その容姿だと、さぞ目立ったことだろうな」

ムウ「うん……そうだね……おうちもお金持ちだから、やっか
　　みとか、たくさん……」
エス「ふぅん……そういうものか」
　　ナチュラルに自慢を混ぜるムウ。興味なさげなエス。
エス「ミルグラムの生活はどうだ？」
ムウ「……どうもこうもないよ。早く帰りたい」
エス「ほう？　なぜだ。お前たちにはそれなりに自由も与えて
　　いる。嗜好品の類も最低限支給している。事実、お前か
　　らもミルクレープの申請があった」
ムウ「そっ、それはそうなんだけど……ミルクレープは食べた
　　けど……おうち、帰りたいよ……」
エス「……ふむ」
ムウ「絶対にパパとママが心配してるもん……ぐすっ……」
　　さみしげなムウ。再び涙ぐみはじめる。
ムウ「だいたいなんなの、ここ。なんでムウがこんなとこに連
　　れてこられなきゃいけないの……」
エス「簡単な話だ。ヒトゴロシだからだろう」

涙まじりのムウを意に介さず続けるエス。

エス「ミルグラムはヒトゴロシを集めてくる。そこは間違いないようだ」

ヒトゴロシの言葉に反応して前のめりになるムウ。

ムウ「ヒトゴロシって……なんでそんなひどいことというの！ムウ悪くないもん！」

エス「ふぅん……殺してない、とは言わないんだな」

ムウ「そ、それは……」

エス「それは？」

ムウ「……ん」

もじもじと言いよどむムウ。

エス「どうした？」

ムウ「……殺したよ。でもあっちが悪いんだよ。殺さなきゃいけないくらい、ムウ辛かったんだもん」

下を向いたまま口をとがらせるムウ。

エス「報復、ということか……」

ムウ「たしかに殺したかもしれないけど、そうじゃなきゃ逃げ

もん……」

エス「ふむ……続けろ」

ムウ「殺しちゃ駄目って言うなら、ムウはずっとつらい思いをしとけばよかったってことなの？」

開き直るムウ。

エス「ふむ。理由はどうあれ、お前は明確に殺意をもって人を殺しているな」

ムウ「なに……それがどうしたの……？」

エス「『うちへ帰して』と言っていたな。仮に……だが、ここを出られても、警察の世話になることになるだろう？」

エスのくちぶりに身体をこわばらせるムウ。

ムウ「……！」

エス「そもそもムウが人を殺したことについて、警察は動いていないのか？」

ムウ「知らないよ……やっちゃった後からしばらく記憶がハッキリしないもん。気付いたらここにいたし……」

エス「そう、なのか……」
　初めて知る事実に少し驚くエス。その様子に頬を膨らませるムウ。
ムウ「自分たちが連れてきたくせに……」
エス「ふむ……ミルグラムには10人の『ヒトゴロシ』が収監されている。どうもこれは日本の法律に照らした殺人犯や犯罪者に限った話ではないようだ。ミルグラム独自の広義のヒトゴロシのようだ。それは何人かに話を聞き、わかってきた」
ムウ「そう……なの?」
エス「ただ、ムウ。オマエは殺意も明確。シンプルだ。オマエたちがいうところの刑法199条殺人罪というものに当てはまるだろう」
ムウ「知らない……ムウそんなの詳しくない……」
エス「言っとくが僕も別に詳しくない。参考までに書庫にある資料で調べただけだ。……ここで重要なのはお前たちの法律に照らせばアウトだという事実だ」

ムウ「しょ、少年法っていうのがあるんじゃないの……」

エス「ある。だが、16歳以上であれば刑事裁判を受け、懲役だ……死刑こそ免れるようだがな。ムウが望むようなマトモな生活は送れないだろう」

ムウ「ちょ、懲役……やだ、そんなの……」

エス「やだといって聞いてくれるものか」

ムウ「やだなの!!」

子供のように駄々をこねるムウ。それを見て少しおかしくなるエス。

エス「くっくっく……ミルグラムは僕の方針で囚人たちに相当な自由を与えているが、実際の刑務所はそうはいかないだろうな。もちろんミルクレープもなしだ」

ムウ「やだ、やだよ……おかしいよ、ムウ悪くないのに懲役なんて……そんなのおかしい」

エス「そうだな……じゃあ、こう考えてみろ。……ミルグラムは法律からオマエを守っていると」

思いがけない言葉にきょとんとするムウ。

ムウ「ま、守ってる……？　ムウを？」

エス「そうだ。ミルグラムは現状、あくまで現状だが、法律を善悪の基準としていない。最終的に僕がどう思うかでしかない」

頬を膨らませるムウ。

ムウ「看守さんの言ってること難しくてわからない……もっとわかりやすく言ってほしいよ」

エス「『私は悪くない』ずっと、オマエはそう言っているだろう……そのとおりだ。殺人それ自体はミルグラムでは罪ではない」

ムウ「……そうだよね？　悪くないよね？」

エス「そうだ。最終的に僕もお前は悪くないと思うかもしれない。僕がムウのことを知り、ムウと同じ感覚であれば、オマエは赦されるだろう」

ムウ「……看守さん……」

言葉尻だけで、エスを味方だと感じ安堵するムウ。

エ　ス「赦されたければ……そこに賭けるしかないんだよ。オマエは」
ム　ウ「ど、どうすればいいの？　どうすれば看守さんは赦してくれるの？　ムウ、なんでもするよ？　あっ、痛いこととか恥ずかしいことはやだけど……あと、怖いのもやだ……」
エ　ス「お前な……」
ム　ウ「だってそうでしょ？　つまり看守さんに気に入られればいいんでしょ？　ムウ言うこと聞く。何すればいいの？」
エ　ス「……さぁな。殊勝な態度だが、僕がどう考えるかは僕もわからない」
エスの言葉に違和感を覚え、顔が険しくなるムウ。
ム　ウ「え……？」
ムウの怪訝な表情に気づかず、得意げに言葉を続けるエス。
エ　ス「ふふ。それこそ、オマエが美人だから赦す。美人だから

赦さないもあり得るという話だ。それを決めるのがミルグラムだからな」

ムウ「ちょ、ちょっと待って看守さん。……あの……」

エス「なに、ちょっとしたジョークだ。僕次第ではそうなる可能性も……」

ムウ「いや、そうじゃなくて……気になるんだけど……」

言いよどむムウ。その様子にようやく気づくエス。

エス「……？　どうした？　言ってみろ」

ムウ「看守さん。なんで全部他人事みたいなの？」

エス「……え？」

ムウ「どうなるかわからない……って。自分の話なのに……なんでそんな他人事みたいなの……」

エス「何を……言っている……」

ムウ「え？　だって、お、おかしいよ。看守さんの意思で決めるんでしょ。看守さんが今どう思ってるのか聞いてるのに……」

ムウの言葉を頭が理解するのを拒み、言葉が出ない。

ムウ「ねぇ」

エス「………」

ムウ「看守さんの言う僕って……誰？」

エス「……ッ……ぁ……」

ムウ「看守さん……？」

様子のおかしいエスに気づき、心配そうなムウ。

椅子を倒し、床に手をつくエス。

エス「……ッ……ァ……ハァ！　ハァ！　ハァ！」

ムウ「看守さん！　どうしたの!?　看守さん!!」

エスに駆け寄り、背中をさするムウ。

ムウ「ねぇ、看守さん！！！」

その手を思いっきり振り払うエス。

エス「うるさい!!　さわるな!!」

ムウ「ひっ！」

感情を爆発させたエスに、悲鳴をあげるムウ。

何が起きたかわからず、目を丸くするが、状況がわ

かり、徐々に目から涙が溢れ出す。

エス「ハァ……ハァ……」

ムウ「ひ……ひ……ひどいぃぃ……ムウ心配しただけなのにぃ……」

エス「……」

ムウ「ぐす……ぐす……もうやだぁ……看守さん嫌いぃ～……」

突然どこからともなくドスッと机の上に乗っかってくるジャッカロープ。驚くムウ。

ムウ「キャッ……ぐす……うさ、ジャッカロープ……どこから……？」

エス「……ジャッカロープ……？」

ジャッカロープはエスに何かを話しかけている。ただその声はムウには聞こえない。そのため見てはいけないものを見るような表情のムウ。

エス「あぁ……わかってる……わかってるよ……」

ムウ「う、うさぎと喋ってる……？」

エス「……言われるまでもない……。僕にもわからないが、も

ムウ「う……うるさいな。保護者じゃないんだから、小言はもういい……行け！」

満足気にジャッカロープが去っていく。見送るムウ。

ムウ「……ジャッカロープ、行っちゃった……」
エス「……はぁ、すまない、取り乱した」
ムウ「……おかしくなっちゃったの……？　看守さん……」
エス「いや、ジャッカロープの声は僕にしか聞こえないんだ」
ムウ「あぁ……完全におかしくなっちゃってるんだ……」
エス「違う。憐れみの目で見るな」

憐れみの目で見ていたムウ。ぷっと吹き出す。

ムウ「ぷっ……」
エス「あん？」
ムウ「ふっ……うふふ、変なの……」
エス「……なんだ。さっきまで泣いていたくせに」
ムウ「なんかもう……ワケわからないことが続いて、一周回っちゃった……難しいこと言ってたと思ったら、うさぎと

話しだすし……ふふふ」
にやけるのが止まらないムウ。少し馬鹿にされてい
るようで不服なエス。
エス「……」
ムウ「なんだっけ……何を聞こうとしてたかも忘れちゃった
……もういいや、怖くなくなったし……」
エス「はぁ、それはなによりだ」
すべきことがわかり、声に明るさが出てくるムウ。
ムウ「つまり、看守さん好みの人になればいいんだよね。そし
たら赦してもらえるんだ……」
エス「……そういうことになるか？」
ムウ「そうだよ。看守さんも人間だし。ムウがんばる。看守さ
んの好みを知るよ……うさぎと話す可哀想な人だけど。
ぶふっ……」
エス「もうそれでいい。お前との話はテンポが悪くてかなわん」
ムウ「ムウ、絶対帰るから……パパとママの元へ帰るんだもん
……赦してもらえればきっと帰れるよね？」

エス「……知らないけどさ……」

ムウの希望的観測に対して、聞こえないように呟くエス。

聞こえないムウは笑顔を見せ始める。

ムウ「うん、やっぱり……考えてみれば全然悪くないムウを捕まえようとする駄目な警察よりも、ミルグラムの方がいいかも」

エス「はぁ……まぁ、それはそれでいいか……大人しく尋問を受けてくれるなら……」

突如部屋にある時計から鐘の音がなり、部屋の構造が変化していく。

ムウ「きゃあ！……何？　壁が動いてる……何が起きてるの？」

エス「はぁ……もう時間か……あまり話せた気がしないが、まぁいい。お前の心の中、覗かせてもらう」

ムウ「……歌にするってやつ……い、痛くない？」

エス「多分な」

ムウ「……痛いならやだ。やらない……」

エス「駄目に決まっているだろう。痛くないから安心しろ！」
ムウ「じゃあやってもいいよ……」
エス「はぁ……そもそも選べるものじゃない」
ムウ「看守さん、せっかくやるんだから、ちゃんと見ててね。ムウ、絶対悪くないから……仕方ないって思うはずだから……」
エス「あぁ、見せてもらうとするよ」

妖しく笑うムウ。

ムウ「……変な判断したら、赦さないからね」
エス「……っ」

その雰囲気に一瞬気圧され、息を飲むエス。

エス「僕を、馬鹿にするなよ」

ムウの肩に手を載せるエス。

エス「囚人番号4番、ムウ。さぁ。お前の罪を歌え」

# 05

1

## ミルグラム監獄内尋問室

薄暗い尋問室の中。
シドウが目を閉じて椅子に座っている。
扉の外からエスの足音が聴こえる。

シドウ「……」

重い扉が開き、エスが姿を現す。

エス「待たせたな。囚人番号5番シドウ」
シドウ「……いいえ、ご苦労さまです。エスくん」
エス「さて、シドウ。尋問を始めよう」
シドウ「はい、どうぞ」

シドウの向かい側に立つエス。
スムーズな進行に少しだけ違和感を覚えるエス。

エス「……うむ。さて、ミルグラムはお前たち囚人の罪を明らかにし、適切な判断をくだすために存在している。そのために僕といくつか話をしよう」
シドウ「よろしくお願いします」

居心地が悪く、軽く首をひねるエス。

エ　ス「……尋問といっても現段階では手荒な真似をするつもりはない。また、虚偽も黙秘も認めている」

シドウ「なるほど。言いたくないことは言わないかもしれませんが、嘘はつかないつもりです」

淡々と答えるシドウに、モヤモヤを抱えるエス。

エ　ス「……シドウ、ミルグラムの生活はどうだ。環境への不満や四人間での問題は発生していないか？」

シドウ「特に何の不自由もなく。四人同士も特に問題は起きていませんね。……エスくんの管理の賜物ではないでしょうか。たいしたものです」

エ　ス「……いや、ううん。ちょっと待て。シドウ」

シドウの発言を制するエス。言いよどむ。

シドウ「はい。なんでしょう」

エ　ス「これは、僕が間違っているのはわかっているんだが……今までに比べてスムーズに進行し過ぎていて、なんだかちょっと気持ちが悪い」

シドウ「そんなことを言われましても」

　　真顔のままのシドウ。

エ　ス「……シドウ、お前はミルグラムに対しての疑問はないのか？」

　　エスの問いに少し考えた後に口を開き始めるシドウ。

シドウ「そうですね……もちろんここは明らかにおかしい。建築様式も、使われている文字も見たことがないものだ。夢や幻を見ていると言う方が納得できます」

エ　ス「……………」

シドウ「しかしそれにしては意識は清明。脈も正常値の範囲。幻覚症状と見られるようなものもない。その説は、俺の中では薄い……」

エ　ス「……ほう」

シドウ「あとは死後の世界で既にここが地獄である……という線を除くとすると、ココは現実。俺自体は正常で、異常な場所にいる……理由もカラクリもわかりませんが、現実逃避していても仕方がないでしょう」

エ　ス　シドウの考察に少し驚くエス。
シドウ「それは性格ですね……単純に悪くないと思っているんですよ、ココのことを」
エ　ス「ミルグラムを……？」
シドウ「ここは俺を殺してくれる」
エ　ス　シドウの言葉に眉をひそめるエス。
エ　ス「なに……？」
シドウ「せっかくの機会ですし……単刀直入に言います。エスくん、君が囚人の処遇を決めているんでしょう？」
エ　ス「あぁ、そうだな」
シドウ「俺は死刑を希望しています。よろしく」
エ　ス「認めん」
　　　　間髪入れずに否定するエス。
エ　ス「お前たちが自分の処置を決めることはできない。それは看守たる僕だけに与えられている権利だ」
シドウ「ですから、その権利を有している看守のエスくんにお願

いをしているんです」

まったく折れないシドウに頭をかくエス。

エ　ス「はぁ……お前が自分の罪に対して反省と後悔をし、極刑を望んでいるというのは受け取った。参考にしよう。僕はその態度を考慮し、考えるだけだ」

シドウ「……」

エ　ス「……勿論、そういうアピールを見せているだけという可能性も残したままな」

シドウ「ふむ……エス君とミルグラムの目的が何かはわかりません。心から歌と映像を取り出し罪を判断すると言っていましたね」

エ　ス「あぁ、それがどうした」

シドウ「そんなまだるっこしいマネをする必要はないんですよ。正しい罰を与えたいなら、さっさと俺を殺せば済む話ですよ」

シドウの語りを聞いていたエス。

怒りをあらわにし、シドウの座っている椅子に脚を

乗せ、睨みつける。

エ　ス「しつこいぞ、シドウ。……立場をわきまえろ」

立ち上がるシドウ。静かに、必死に訴えかける。

シドウ「聞いてくださいエスくん。俺は人を殺しています。それも大量に。利己的な理由でも殺しているし、正真正銘の立派な殺人者です。……赦す理由もないし、赦されたいとも思っていない」

エ　ス「……わからんやつだな、お前は」

エスの威嚇をものともせず聞く耳を持たないシドウ。

シドウ「そうでなければ、俺に殺された人間もその家族も納得しないでしょう……」

エ　ス「……知ったことか。僕は被害者の味方というわけでもなければ家族でもない」

シドウ「……」

不満げな息を漏らすシドウに、ため息をつくエス。

エ　ス「はぁ……そもそも僕が決めるのは『赦すか』『赦さないか』だけだ。その後の刑の内容までは知らん」

シドウ「そうなんですか……。エスくんも知らないことが多いんですね」

エ　ス「お前らのその後のことを知ることで、赦すかどうかをフラットに判断できなくなるのを避けるためのものだと理解しているがな……」

シドウ「ふむ……しかし、ここからは死のニオイがします。きっとミルグラムの行きつく先には何かしらの死が待っています……」

エ　ス「……死のニオイ？」

シドウ「えぇ、経験上なんとなくわかるんです。死のニオイが充満している場所」

エ　ス「……そうなのか……？」

シドウの謎の発言に考え込み思わず独りこぼすエス。考えるのをやめて、話題を切り替える。

エス「どちらにせよ、ミルグラムは三審制だ。じっくり赦す赦さないを判断させてもらう。お前が赦されたくないと願おうと、僕が赦すべきと判断すれば、遠慮なく赦させて

もらう」

シドウ「三審制、ね……長すぎますね。早く逝かせてもらいたいものなのですが……」

エドス「お前の都合など知るか。ルールに文句を言うな」

シドウ「三審制ということは……例えば俺が一審で赦されず、控訴をしなければその場で処遇が決まるのでは？」

エ　ス「それは日本法の三審制だ。ミルグラムのものとは違う。一旦そこらへんの常識を捨てろ。そもそも日本でいえば、監獄法の廃止に伴い、監獄自体存在していないはずだ」

シドウ「………」

エ　ス「どうした、目を丸くして」

シドウ「いや、子供なのにたくさん勉強をしたのだなと思って」

エ　ス「……おい、バカにしてるのかお前」

シドウ「え？ いえ、そんなことは……」

エ　ス「ある。さっきから気になっていた。エスくんエスくんとナメた呼び方を……僕は看守だぞ」

シドウ「あぁ……それは、理解しています……しかし、キミは実

際に子供です。倍近く生きているであろう俺からすると

エ　ス「なんだ」

シドウ「……キミみたいな子供がこの役割を任されていることへ

の同情を感じます」

エドス「……はぁ？」

シドウ「キミが看守をやっている事情も理由も知りませんが、

きっと苦悩もあることでしょう。頑張ってくださいね」

ぽんぽんっとエスの頭に手を置くシドウ。

エ　ス「……！」

はっとするエス。

エドス「はっ……はは、なるほど。なるほどな。そうか、そうか。

「すぅー……っはぁー……すぅー」

怒りの臨界点を越えたエス。深呼吸。

シドウ「エスくん……？」

シドウの言葉に溜まっていたストレスが噴き出す

エス。

エ　ス「きやすく頭を……触るなぁ!!」

思いっきり座っているシドウのスネを蹴るエス。

シドウ「うぐっ!?」

予想外の痛みに思わずうずくまるシドウ。

椅子が転がる。

シドウ「おっ……ちょ……ちょっとまってください……」

エ　ス「はー、スッキリ」

身悶えするシドウをよそに晴れ晴れした様子のエス。

シドウ「と、突然……スネを蹴るのは……よ、良くない……」

エ　ス「黙れ！　お前が今までの囚人でダントツ気に入らん！　悲観して、知った風な口で、大人ぶって冷静な顔をしやがって、あまつさえ僕の頭をぽんぽんしやがって！　僕はお前の子供か？　あぁ？　ふざけるな！」

シドウ「……て、手荒なマネをしないと言いませんでしたっけ……」

息を切らすシドウを見下ろし、腕を組むエス。

エ　ス「ケース・バイ・ケースだ！」

シドウ「な、なんという……」

エス「……おい、シドウ。何が死を望んでいるだ……バカにするなよ。必死に生きたいと願え！　生への執着があるからこそ、罪に対しての罰は存在するのだ。お前の存在はミルグラムと僕への冒涜だ！」

シドウ「……エスくん……」

エス「スネを蹴られれば痛みがあるだろう！　痛ければうめき声をあげるだろう！　涙が出るだろう！」

シドウ「……えぇ」

エス「ざまぁみろ、お前が死にたいと嘯いても、その痛みはお前の肉体が死にたくないと叫んでいるのと同じだっ！」

シドウ「………」

エス「生きてるうちはきちんと生きろ。死んだような顔をするな。そんな大人が僕を子供扱いするな。不愉快だ。以上」

エスの目を見て心が揺れるシドウ。一瞬言葉を失う。

シドウ「なるほど……痛みがあるのは、生きたい証拠だと……」

エス「ふん！」

シドウの表情が元の冷静さを取り戻す。立ち上がり、
服のホコリをぱっと払いながら口を開く。

シドウ「……ですが、反論させてもらうと、俺のスネの侵害
受容器が痛みを感受し、脊髄そして脳へ痛みの信号
を伝搬したというだけの、ただの反応にすぎません。
侵害受容性疼痛(しんがいじゅようせいとうつう)といいます」

エ　ス「……あ?」

シドウ「ですから、俺が死にたいと思っていても、意思に関係な
く起きる出来事ですので、エスくんの言っていることは
間違いです」

エ　ス「……大人げない……」

シドウ「ははは、スネを蹴られた仕返しですよ……でもね」

悲しげに笑うシドウ。

シドウ「素敵な間違いだと思います。眩しくて、目をそむけたく
なるほど。やはりキミは子供です。でも、それが俺はと
ても嬉しい」

エ　ス「シドウ……」

突如部屋にある時計から鐘の音が鳴り、部屋の構造が変化していく。

エース「時間、か……」

シドウ「歌を抽出する……というやつですか。興味深いですね。俺からどのようなものが出てくるのか」

エ　ス「どこまでも冷静だな……言い残したことはあるか？」

シドウ「あぁそうだ。他の囚人がどう思っているかはわかりませんが、俺はミルグラム自体には賛成なんです」

エ　ス「そうらしいな……」

シドウ「俺は正真正銘の殺人者です。いつ裁きがくだっても構わない。ですが、できるなら……法律に赦さないと言われるよりも」

妖しく笑うシドウ。

シドウ「エスくんみたいな子に……赦さないと言われたかったんです」

エ　ス「……はぁ？」

シドウ「この役割には同情もするし、俺の死を押し付ける申し訳

無さもある。でも、キミがいい……俺に似合いの終わり方をくれる」

　　目をまるくするエス。

エ　ス「お前、何を言っているんだ……そういう、特殊な……」

シドウ「はは……さて、どうでしょうね。とにかく俺の今の目標は君に罰されることです」

エ　ス「……ううむ……」

　　今までになく楽しそうなシドウ。若干引き気味のエス。

シドウ「正しい判断をくだすことを期待しています」

エ　ス「前提が違う。僕の判断こそが正しい。……それが、ミルグラムだ」

シドウ「じゃあ、君が正しいことを、期待します」

エ　ス「ふん、言ってろ……」

シドウ「俺をちゃんと赦さないでくださいね……エスくん」

エ　ス「……はっ、何度も言わせるな！　お前の希望など、知るか！」

06

シドウの肩に手を載せるエス。

エ　ス「囚人番号5番、シドウ。さぁ。お前の罪を歌え」

06

1

ミルグラム監獄内　尋問室

薄暗い尋問室の中。

気にせず、鼻歌まじりのマヒル。

マヒル「～♪　看守さん、まだかなぁ……」

重い扉が開き、エスが姿を現す。

エ　ス「待たせたな。囚人番号6番マヒル」

マヒル「……あっ。ううん、今きたところ～」

エスの姿を見て、嬉しそうに笑い、手をふるマヒル。

エ　ス「あぁ？」

マヒル「ふふふ。デートの待ち合わせみたいでドキドキしちゃった」

エス「……僕が言うのもなんだが、こんな監獄の中でよくそんなことが言えるものだな」

マヒル「え～？　非日常ですっごくロマンチックだよ～。おかげさまで毎日楽しくやっておりますっ♪」

エス「はぁ……のんきなものだ」

マヒル「あっ、それよく言われる～」

ため息をつきながらマヒルの向かいの椅子に腰掛けるエス。

エ　ス「状況を理解しているか、マヒル。お前はヒトゴロシ。囚人だ。遊びに来ているわけじゃない」

マヒル「ヒト、ゴロシ……そうだね、否定はできないかな」

エス「そして、今からお前の罪を明かすための尋問を行う。ロマンチックとは程遠い状況だ」

マヒル「……罪、罪。そうだねぇ……」

何かいいたげに苦笑いをするマヒル。

エスは構わず続ける。

エ　ス「ミルグラムはお前たち囚人の罪を明らかにし、適切な判断をくだすために存在している。そのために僕といくつか話をしよう」

マヒル「お話！　するする～。看守さんマヒルに興味あるの？嬉しい！」

にこやかなマヒルに対して、小声で呟くエス。

エ　ス「……フン。そうやって僕のペースを乱そうとしたって無駄だ。お前らはいつもそうなんだ……ろくでもない」
マヒル「何ブツブツいってるの？」
エ　ス「なんでもない。尋問を始める！　そうだな……まずは」
マヒル「はーい！　椎奈真昼、22歳です。ふつつかものですが、よろしくおねがいしますっ！」
エ　ス「質問はこちらからっ……いや……そのパターンはユノで知ってる……大丈夫だ、落ち着け僕……」
激昂しそうになるも、徐々に息を整え抑えていくエス。
マヒル「はい、看守さんの番」
エ　ス「はぁ!?」
マヒル「お名前は？　年齢は？」
エ　ス「……」
マヒル「お名前は!?　年齢は!?」
マヒルの勢いに押され、おずおず答えてしまう。
エ　ス「エス……。年齢は……15……だと思う」

マヒル「15歳！　その歳で看守さんなんだよね？　小さいのに偉
　　　いねぇ～。困ったことがあったらなんでもお姉さんに相
　　　談してね！」
エ　ス「おい……マヒル、なんで僕が答えて……」
マヒル「ねぇねぇ、エスって名前は本名なの？　そもそも日本人
　　　じゃないのかな。苗字とかないの？」
　　　前のめるマヒル。のけぞるエス。
エ　ス「し、知らん。どうでもいい。僕はエスだ。それ以外は知
　　　らないし、知る必要もない」
マヒル「えっ、記憶喪失ってこと？　かわいそう～。気にならな
　　　いの？　自分のこと」
エ　ス「……興味ないな。僕は目の前の仕事に向き合うだけだ。
　　　余計なことを知らない方が集中できるというものだ」
マヒル「えぇ!?　マヒルは興味あるよ、看守さんに！　知ってい
　　　こうよ、看守さんのこと！」
エ　ス「僕のこと……知る……？」
　　　思考が止まるエス。キィーンと耳鳴りがする。

その様子を見て不思議に思うマヒル。

マヒル「看守さん?? どうしたの?」

エス「……」

マヒル「ねーえ、看守さーん」

エス「……あ……、あぁ……いや、すまない……」

マヒル「ぼーっとしちゃうの? 大変なお仕事だろうし、頭の使いすぎかも。ハーブティーがいいんだよ～。あっ、イチョウのお茶があってね。脳の活性化に良いんだって～!」

エス「……あぁ、そうか……試してみる……じゃない!! 僕のことはどうでもいい! 今は尋問中だ!」

マヒル「えぇ～。楽しいのに～」

エス「だいたい、なんでお前から僕に質問をしてくる! 立場をわきまえろ!」

マヒル「でも、でもね、看守さん。相互理解って大事だと思うの! 看守さんはマヒルのことを知りたいんだよね?」

エス「……まぁ、そうなるな」

マヒル「嬉しい♪ あ、じゃなくて、そのためにはお互いに理解

することが第一歩だと思うんだよねぇ～。看守さんのことをよく知ってるからこそ、話したいことも増えると思うし～」

苛ついていたエスだが、マヒルの言葉に感じるものがあり――

エ　ス「……ふむ……たしかに人によってはそういうアプローチが効果的な場合もあるか……」

マヒル「そう！　まずは勇気を出して自分をさらけだすこと。そうすると相手も安心して、自分のことを話してくれるようになるんだよ！」

エ　ス「……ほう、いわゆる自己開示の返報性か……しかし、意外だな、お前が人心に関する知識に長けているとは」

感心した様子のエス。対照的にぽかんとしてるマヒル。

マヒル「え？　じ、じこかいじのへんぽーせい？」

エ　ス「僕はお前たち囚人のことを深く知るために、あらゆる知識を得ている最中でな。読んだ本の中にあったぞ」

マヒル「へぇ～！　看守さんも読んだの？　私も本で読んだんだよ～！　あの号は巻頭の女子１０００人のラブトークもよかったよねぇ!?」

エ　ス「……なんだそれは」

マヒル「え～……？　読んだんじゃないの、レインの恋愛テクニック特集」

エス「れいん？」

マヒル「うん、レイン。マヒルの愛読書。ファッション、トレンド、占い、恋愛特集なんでもアリ！〝もっと輝くワタシ〟になるための最強女性誌！」

エス「はぁ……勘違いだった。忘れてくれ」

びしっと得意げなマヒル。

マヒル「そうだ、看守さんは恋愛に興味ないの？　恋愛トークしたい！　15歳でしょ？　思春期まっさかりだぁ。好きな子とかいるの～？」

エ　ス「ふむ、それこそ本当に興味がないな」

マヒル「えー、ないないそんなこと。恋愛っていうのは地雷みた

いなもので、いつか爆発するんだよ。早いか遅いかの違
いでしかないもの。看守さんも今は興味なくてもいつか
爆発するんだよ！　運命的な出会いをするんだから！」
エ　ス「……よく喋るなお前」
マヒル「うんうん、最初は否定しちゃうよね。マヒルもそうだっ
たもん。あくまでドラマや少女漫画への憧れで、自分と
は違う世界のことだと思ってたし～？」
エス「僕にはよくわからないが……恋だの愛だの、そんなに大
事なものかな」
怒涛の勢いでうっとりと語るマヒルを見て、ため息
交じりにこぼすエス。
マヒル「大事だよ」
エ　ス「………」
マヒルの返答は一種硬質的な響き。その断定的な物
言いに一瞬止まるエス。
マヒル「大事だよ。何よりも」
エ　ス「……なるほどね」

緊張感に、襟を正すエス。

エス「お前にとっては、それか。囚人番号6番マヒル」

マヒル「え～？　なにが？」

エス「なんとなくね。何人か尋問してきて、僕も見当がつくようになってきたんだ。お前たちの大事にしているもの」

マヒル「マヒルにとっての大事なものが愛ってこと？　ふふ、正解。別に隠してないけどね」

エス「では、お前のヒトゴロシも、それに由来するものか？」

マヒル「………」

一瞬止まるマヒル。

マヒル「そう、だね。愛だと思う」

エス「お前は愛ゆえに、人を殺した？」

マヒル「………そう、だね」

エス「なるほどね。恋愛沙汰からの殺人か？　嫉妬、怨恨、略奪、珍しい話ではないな」

エスの言葉に小さく首を横にふるマヒル。

マヒル「違うよ……そんなんじゃない。マヒルは殺したくなんてなかった」

エ　ス「………」

マヒル「マヒルはただ、マヒルでいただけだよ」

エス「どういうことだ？」

マヒル「……言わない。看守さんのことまだ良く知らないから」

エ　ス「……相互理解ね」

マヒル「えへへ、そういうこと」

エ　ス「面倒なやつだな……まぁ良い。お前自身はどう思っているんだ？　お前のやったことは赦されるのか、赦されないのか」

マヒル　エスの問いに苦笑いのマヒル。

マヒル「う～ん……もしマヒルのやったことが赦されないなら、もう生きてる意味ないなぁ……正直。あはは」

エス「ヒトゴロシをしないと生きている意味がないというのか？　これはこれは、とんだ危険人物だ」

マヒル「あ、いや、うーん。そう言うと急に物騒だねぇ。ヒトゴ

エ　ス「ロシなんて全然したくないよ。でも……」
マヒル「……」
エ　ス「私は愛のために生きるって決めたから」
マヒル「愛のために……」
　理解出来ない表情のエスに構わず、マヒルはうっとりした目で語り続ける。
マヒル「私は人を愛する素晴らしさを知ってしまったの。凄いんだよ、毎日が輝いて、色づいて見える。当たり前の景色が、ドラマみたいに映画みたいに変わるんだよ……」
エ　ス「よくわからないな」
マヒル「あう……、マヒル語彙力あんまりないから月並みな表現しかでてこないんだけど～……でも、看守さんもわかるよ、恋をすれば、きっと」
エス「さぁね。どうかな」
マヒル「恋が、愛がなければ私の人生はもう味がしないよ。それが駄目だっていうなら、生きている意味がないなぁ」
エス「お前の愛が、人を殺すとしても……？」

マヒル「……いじわるだなぁ」

エ　ス「……お前の愛が人を殺したんだろう？　それでも、もう一度人を愛するのか？」

マヒル「……」

　悲しそうにため息をつくマヒル。

マヒル「……むしろマヒルは看守さんに教えてほしいよ。私がやったことは赦されないことなのか」

エ　ス「なに？」

マヒル「マヒルの愛が人を殺しちゃうかもしれないなら、私はもう、人を愛してはいけないのかな」

エ　ス「……」

マヒル「ねぇ、看守さん。教えて。私は人を愛することを赦されないの？」

　不安げな表情のマヒル。エスは少し考えてから、

エ　ス「……わからん。お前の言っていることは、さっきから全然ピンとこない」

マヒル「そっか……そうだよね……マヒル、変だよね。わかんな

いよね」

エ　ス「あぁ……まだな」

マヒル「えっ……」

エ　ス「あくまで、まだわからないというだけだ。すぐにわかってやる。待っていろ」

マヒル「……！」

エ　ス「正直今回は僕の苦手分野だ。だからこそお前のいうとおり、もっと理解すべきなのかもしれない」

マヒル「看守さん……」

エ　ス「僕はお前の看守だ。苦手だろうと、わからんと匙を投げたりはしない。お前の罪を判断し、赦す、赦さないを決めるまではな」

マヒル「え、え……マヒルのことずっと見ててくれるの……？」

エ　ス「あ？　まぁ仕事だからな」

マヒル「あうっ……」

がたんと立ち上がり、胸を抑えるマヒル。

エ　ス「なんだ」

マヒル「きゅんとした……」
エ　ス「……何を言っているんだ、お前」
マヒル「マヒル……仕事に熱心な人、好き……」
エス「お前、ふざけてるだろ」
　　顔をぱたぱたとあおぐマヒル。激しく首を振る。
マヒル「あっ……駄目駄目。き、気をつけてね……あの、あの、あんまり優しくしちゃうと、死んじゃうかもよ？　なんて、ね」
エス「優しくしているつもりもない……お前の言っていることは徹頭徹尾ワケがわからん……が、これだけは約束してやろう」
　　エスはニヤリと笑う。
エ　ス「安心しろ。お前が何をしようと、何を思おうと、僕は死なない」
マヒル「!!」
エ　ス「僕はこのミルグラムの、看守だからだ」
マヒル「ああっ!!」

マヒルがくらっと立ちくらみすると同時に。
突如部屋にある時計から鐘の音が鳴り、部屋の構造が変化していく。

マヒル「な、なに!? マヒルの恋が爆発した音!?」

エス「違う。尋問の終了時間だ。全くいつもながら予定通りいかないな、お前たちは……」

頭を抱えるエス。もじもじとするマヒル。

マヒル「あの、あの、歌を抽出するっていうやつよね？ マヒル歌あんまり得意じゃないよ？」

エス「別にお前が歌うわけじゃない。お前の心象風景が勝手に歌と映像として現れるだけだ……」

マヒル「全部見られちゃうんだ……ちょっと恥ずかしい……かも」

エス「どうだろうな。経験上、映像の具体性も、抽象度も人による。自身の罪をどう認識しているかによるのかもしれない」

マヒル「へぇ～……」

エス「どちらにせよ。お前が世界をどう見ているか、確認させ

てもらうつもりだよ」
マヒル「そっかそっか……、マヒルも見たいなそれ」
エス「……？」
マヒル「マヒルにとって、愛のある世界はとても美しかったから。……あ、看守さんもきっと愛のすごさをわかってくれるはずだよ～」
エス「ふぅん。期待してる」
マヒル「あれ、素直だぁ」
エス「単なる知識欲だ。知らないものを知るのは、楽しいだろう……お前たちを知るためには様々な知識を得る必要がある。それは悪くない気分だ」
マヒル「ええ……マヒル、勉強熱心な人も好き……」
エス「黙ってろ」
マヒル「いじわる～」
部屋の構造変化が終わり、エスがため息をつく。
エス「はぁ……お前ばかり話していて、仕事した気がしないぞ、僕は……。一応聞いとくが、言い残したことはあるか？」

07

マヒル「あ、あ、一個だけ」
エ　ス「なんだ、まだあるのか」
マヒル「あの。あのね……」
上目遣いのマヒル。
マヒル「エスくんって、呼んでいい？」
エ　ス「ノーコメントだ!!」
うんざりした顔で、マヒルの肩に手を載せるエス。
エ　ス「囚人番号6番、マヒル。さぁ。お前の罪を歌え」

# 07

1

## ミルグラム監獄内 尋問室

薄暗い尋問室の中。
物憂げなカズイ。

カズイ「さて、どう出るかな……」

外の廊下、エスが近づいてくる物音。
素早く尋問室の扉の死角に身をひそめるカズイ。
扉が開く――

エ　ス「待たせたな。囚人番号7番カズイ」

扉を開けるが、カズイの姿はなく、

エ　ス「……？」

カズイ「失礼する、よっと」

死角から忍び寄り、素早く後ろからエスを羽交い締めにし、拘束しようとするカズイ。

エ　ス「何!?」

カズイ「悪いね。ちょっとばかし、身柄を拘束させてもらうよ……」

エ　ス「き、貴様！　無礼だぞ!!」
カズイ「まぁまぁ。痛くしないから暴れないで……って……ん……あれ？」
　　　　エスに対して力が入らず、拘束を解いてしまうカズイ。スキを見て抜け出すエス。
エス「ぷはっ」
カズイ「なんだい、これ……力が入らないね……」
エ　ス「はぁっ……！　囚人番号7番カズイ！　お前、自分がやったことの意味がわかっているのか……これは重大な反逆行為だ！」
カズイ「……ふむ」
エ　ス「おい、聞いているのかカズイ！」
　　　　激昂するエスよりも、頭の整理に夢中なカズイ。
カズイ「『看守くんに殴りかかろうとしたら拳がピタッと止まった』……フータの証言から見えない壁のようなイメージを持っていたんだけどね……だからサブミッションならどうかと思ったんだけど……」

エス「……？」
カズイ「極めようとしたら途端に力が入らなくなった……これは、
何だろうね……まるで俺自身がキミを攻撃することを嫌
がっているような……」
エ　ス「フン……僕もくわしくは知らない。『囚人から看守への
攻撃はできない』とだけ聞いている」
カズイ「なるほど……？　いや、でも魔法みたいなバリアじゃな
いだけでおじさん的には助かるね。まだ現実の路線で考
えられる……そっちも眉唾だけど、催眠術みたいなもの
とか……」
エ　ス「オイ！　そんなことはどうでもいい！」
カズイ「ん？」
エ　ス「そこに座れっ！　カズイ！」
カズイ「あぁ、はいはい」
怒りの収まらないエスを一瞥し、椅子に座るカズイ。
常にヘラヘラと意に介さない様子。
エ　ス「囚人風情が看守の僕を拘束しようとするなど、思い上

がりも甚だしい……赦さないと即断してもいいんだぞ、
こっちは。何か申し開きがあれば言ってみろ」

カズイ「……うーん」

カズイは少し考えた後、にこやかに両手を合わせる。

カズイ「ごめん！」

エス「……ハァ？」

カズイ「いやぁ、ゴメンゴメン。元々看守くんに危害を与えるつもりはなかったんだよ。なにぶん、こっちも情報不足でさ。安全に制圧して、色々この監獄の情報を聞き出したかっただけさ」

エス「……………」

カズイ「ほら、場合によっては皆を連れて、脱出しないといけないかもだし。一応おじさん最年長だからさ。看守くんに武力が通じるかは検証しておかないと」

にこやかなカズイが饒舌に喋る。

エス「普通、僕の目の前で言うか、そういうこと」

カズイ「うん、言っても大丈夫な子だと判断した」

エス「ほう？ ナメられたものだな……」

カズイ「あぁいやいや、そうじゃない。気を悪くしないで。まぁ、

　これは推測なんだが、俺たちが君を攻撃できないように、

　君が俺たちを攻撃する手段もないと踏んでいるんだ」

エ　ス「……」

カズイ「どうだい？」

エ　ス「……フンっ！」

　余裕の決め顔のカズイの頬に、一撃ビンタを食らわすエス。

カズイ「痛ったい!!」

エ　ス「おい、どうした。攻撃できたぞ？」

カズイ「そ、そういうことじゃないってば……ま、まったく、手が早い子だ……」

エ　ス「あ？ なんだ。早く要点を言わねば、もう一撃ビンタをくらわすぞ」

カズイ「ちょ、わかった。待っておくれ」

　エスの言葉に、焦るカズイ。咳払いをして、話を続

ける。

カズイ「ゴホン……おそらく期間が決まった監視を目的としているからか、俺たちに致命的な危害を加える手段が用意されていないんじゃないかな。肉体的な罰則や、拷問の類みたいなね。でなければ、今君に害しようとした俺になんらかの処罰を加えているはずだ」

エス「……」

カズイ「そしてさっきの口ぶりからするに、君もこの状況のメカニズムを完全には理解していない。何者かからの指示で動いているようだ……」

エス「何が言いたい」

カズイ「つまり、看守と囚人という立場に分かれているだけで、俺たちは情報が足りないまま役目を全うしている……という意味で、フェアだともいえる」

カズイの言葉を反芻するエス、考え込む。

エス「僕と、お前たちが……フェア、だと……」

カズイ「ま、推測に過ぎないけどね……希望的観測も含めて、看

守君には俺の思惑を話しても大丈夫だと判断したって
わけ」

エス「ふむ……しかし、良く喋る男だな……」

カズイ「おっと、たしかに。ははは、若い子相手に長話。おじさ
んの良くないクセだ」

エ　ス「まぁ、いい。お前の言うことはなかなか興味深い。確か
に僕もミルグラムについて知らないことがあるのは事実
……」

カズイ「ふむふむ」

衣服を正し、カズイに冷たい目線を向けるエス。

エス「だが、僕はこのミルグラムの看守で、お前は囚人だ。そ
れに間違いはない」

カズイ「……」

エス「僕のやることは変わらずひとつだ。さぁ、囚人番号7番
カズイ。尋問を始める……」

カズイ「なるほど。若いのにプロだね」

優しく微笑むカズイ。

カズイ「ま、色々教えて貰ったし。こっちも付き合おうじゃないか……取り調べされるのは、初めてで新鮮だ」

おどけたように、姿勢を正してみせるカズイ。

カズイ「改めて、椋原一威。39歳だよ。よろしくね、看守くん」

エス「フン……お前たちは皆、ヒトゴロシの囚人である。カズイ、お前も例外ではないな」

カズイ「……ヒトゴロシ、ね。まぁ否定はしないよ」

エス「ほう、認めるんだな」

わずかに物憂げな表情を浮かべるカズイ。

カズイ「……認める。少なくとも俺は自分をヒトゴロシだと思っている。後悔もしてる……反省のしようはないけどね……」

エス「反省のしようがない……？」

表情を切り替え、エスに改めて向き直るカズイ。

カズイ「それよりその話、一体どこが情報元なんだい？　俺以外に俺をヒトゴロシと捉える人間は数少ないはずだよ」

エス「どういう意味だ？」

カズイ「例えば、無罪放免になったヒトゴロシたちを集めてきて
代わりに裁こうとしてるとか……そういう頭のおかしい
連中かとも思ったんだけどね……俺のコレをヒトゴロシ
とするならば、あまりにも解釈が広すぎる……」

思案モードに入ったカズイ。苦言を呈するエス。

エス「おい、カズイ……今はお前が質問する時間ではない」

カズイ「それに俺をヒトゴロシと認識するにも俺について深く知
る人物でなければ不可能だ……一体何者が俺たちを捕ら
えているのか、謎だね……」

エス「どうでもいいし、興味がない。僕はお前を赦せるか赦せ
ないかだけわかればいい」

カズイ「おや、気にならないのかい？自分が誰の命令で動いて
いるかもわからないままで」

エス「不要だ。それに……考えると調子が狂う」

カズイ「ふぅん、そういうものかな」

エス「いいから探偵ごっこはやめろ。不快だ」

カズイ「はいはい」

カズイの態度に不機嫌なエス。なだめるカズイ。

エ　ス「カズイ、他の囚人との関係はどうだ」

カズイ「あぁ、いいと思うよ。心配しなくても皆仲良くやってる。若い子がストレスを抱えても仕方ないなと思っていたけれど、うまいことバランスがとれてるね」

エ　ス「そこは誰に聞いてもだいたい同じだな。囚人同士でいさかいなどは起きていないと」

カズイ「それも今はってトコじゃないかな。何を考えているかわからない子もいる……そっちの出方次第でどうなるかわからないねぇ」

エ　ス「ふぅん」

カズイ「監獄の環境が良すぎるのもあるね。なんならずっとここへ住んでいたい子もいるんじゃない？　なんでこんな環境が用意されてるのか……」

カズイのセリフを遮るように口をはさむエス。

エ　ス「おい、質問のたびにこっちから情報を引き出そうとするな」

カズイ「ははははぁ、バレたか。まぁ許してよ、おじさん大人だからさ、少年少女たちのために少しでも情報持って帰らないと」

悪びれないカズイに、肩を落とすエス。

エ　ス「はぁ、お前もシドウと同じだな。気に入らん。余裕ぶって……大人というのはみんなそうなのか？」

カズイ「ははは、シドウくんもそうだった？　まぁ彼は本当に冷静で余裕なんじゃないの。肝っ玉も座ってそうじゃない」

エ　ス「？　お前は違うのか？　ずっとヘラヘラしてるように見えるが」

カズイ「んー……そう見えてるかい？　そいつは良かった」

エ　ス「何が良いものか。気に入らないな。自分をこう見せようという意識が確立した笑顔だ。他人からの印象で逆算された、ウソが張り付いたような顔をしている」

カズイ「……これはこれは……なかなか手厳しい」

エスの物言いに苦笑いするカズイ。沈んだ声で語り始める。

カズイ「はは。怖くないわけじゃないよ……俺だって」
エ　ス「……」
カズイ「でも、俺は年長者の責任もあるしね。こういう異常事態の中でも、少年少女の前でうろたえるわけにはいかないじゃない」
恥ずかしそうに頭をかくカズイ。余裕の表情は崩れている。
カズイ「ま、大人は常に本音を隠してでも、笑顔でいる必要があんのよ。きみたち若者に失望されないようにね」
エ　ス「そうか」
カズイ「ウソが張り付いてると言われれば、そうかもね。……悲しいことに、ウソがうまくなんのよ。大人になるとね」
エ　ス「大人、ね……」
カズイ「君にはバレてしまうんだな……もしかしたら不思議な力があるのかもしれないね」
カズイの語りに対して、黙っていたエス。
笑いがこらえきれない。

エス「……く、くくく……」
カズイ「……？」
エ　ス「くく…なぁ、カズイ」
カズイ「なんだい？」
　目を伏せるエスに、笑顔で答えるカズイだが、
エ　ス「それもウソだな」
カズイ「……え？」
　意外な言葉に目を丸くするカズイ。
エ　ス「弱みを見せて、こちらの心をほどこうとする。それも大人とやらのテクニックか？」
カズイ「ははは、何を……言っているんだい」
エス「その笑いをやめろ。不快だ」
カズイ「……おいおい、いったいどうしたっていうんだ」
エ　ス「そうやって痛み無く、負けたフリが上手くなるのが大人か？　それでうまくやってこれたか？」
　呆れたように笑うエス。
カズイ「……」

エス「見せるための弱みを用意している。それに騙されるヤツもいるか。なるほどなるほど、長く生きるとそういうことができるようになるんだな」

言葉を失うカズイ。

エス「わかるぞ。お前のウソが人を殺したな」

カズイ「……」

エス「まぁ、あくまで推測だがな」

カズイ「……意趣返しのつもり、かな……」

エス「どうだ？」

カズイ「……ま、それも否定はしない。大人って、そういうもんなんだよ……」

エス「くく……大人を、お前の弱さの理由にするなよ。見苦しい」

カズイ「……！」

エス「この場所においては、お前が大人でも子供でも関係ない。ミルグラムはお前自身をどこまで見つめて逃さない」

……エスの真っ直ぐな視線に、静かにうつむくカズイ。

カズイ「……なるほどね。君の言う通りかもしれない。深い傷を
つけないように、受け身をとることばかりうまくなって
いく……」
エ　ス「……」
カズイ「あぁ……そうだ……たしかに俺のウソがアイツを殺した。
そして今も俺は何も変われていない……違うな、こう産
まれてしまったからには、変われない……だが……」
うつむいていたカズイが顔を上げる。
その目は昏く、今までの面影はなく、
呪詛のような言葉を吐く。
カズイ「俺の気持ちも知らずに」
カズイ「知った風な口を聞くなよ……子供が」
エ　ス「……！」
一瞬圧力におののくエスだが、ニヤリと笑う。
エス「はじめまして、椋原一威。ようやくお前と目が合った気
がするよ……よろしく、僕はエスだ。ミルグラムの看守
をしている」

カズイ「………」

カズイにいつもの表情が戻る。

薄く、困ったように笑う。

カズイ「ハッ。オシャレな言い回しするね……まぁ後悔しないようにね。こういう付き合いは痛みをともなうぜ」

エス「構わないさ、お前らと痛み合うのが、僕の仕事だからな」

カズイ「プロだね……」

エス「…きっと人の罪を覗くというのは、それくらいの覚悟のいることなんだろうさ」

エスが静かにつぶやくと、

突如部屋にある時計から鐘の音が鳴り、

尋問室の部屋の構造が変化していく。

カズイ「なんだい……？」

エス「尋問終了の時間だ……惜しいな。今からが本番だったのに」

カズイ「はぁ…助かった。こっちはお腹いっぱいだよ」

おどけて笑うカズイにエスが向き直る。

エ　ス「そうだ、カズイ。さっき『俺の気も知らずに』と言ったな？」
カズイ「あー、まぁ。改めて言われると恥ずかしいね。子供相手にそんなこと言っちゃって……」
エ　ス「安心するがいい。今からお前の気を知りにいく」
カズイ「……心象を歌と映像にする……ね……そうか」
エ　ス「そういうことだ」
少し考えたのちに、おずおずと口を開くカズイ。
カズイ「あー……看守くん」
エ　ス「なんだ」
カズイ「知ってのとおり、俺はこういう性格でさ。自分のことをまともに人に話すことができないんだ。図体だけは大きいのに女々しいとこあんだよね……」
エ　ス「自虐には興味がない」
カズイ「……今この状況になって思うことがある」
遠くを見るカズイ。
カズイ「俺は……俺は、隠してきた俺自身の罪を、弱さを、誰か

に無理矢理暴かれることを、心のどこかで期待していたのかもしれない……」
エス「……カズイ」
カズイ「どうだい？　大人って、不器用だろ……？」
エ　ス「うるさい。お前が不器用なだけだ」
カズイ「ははは、手厳しいね。だけど、悪くない」
カズイの肩に手を載せるエス。
エ　ス「囚人番号7番、カズイ。さぁ。お前の罪を歌え」

# 08

1

## ミルグラム監獄内　尋問室

薄暗い尋問室。

尋問室でアマネが待つ中、エスが扉を開く。

エス「待たせたな、アマネ」

アマネ「はい、待たせましたね。遅刻です」

不満げな眼差しのアマネに、気づかず続けようとするエス。

エス「さて、尋問を始めよう」

アマネ「いやです」

エス「は？」

アマネ「認めません」

エス「……どういうことだ？」

アマネ「まずはきちんと謝るべきです」

エス「……はぁ」

アマネは椅子から立ち上がり、エスをびしっと指をさす。

アマネ「いいですか！」
エ　ス「……！」
アマネ「時間は、どんな環境においても、厳守されるべきです。
　悪いことをしたら謝らねばなりません。それは私のルー
　ルであると同時に、社会のルールでもあるはずです」
エ　ス「……もういいか？　尋問を始めたいんだが？」
アマネ「いいえ、話はまだ終わっていません。まずは真摯に謝罪
　すべきです」
エ　ス「はぁ……」
　　エスのうんざりした顔を見て、アマネは更に眉をひ
　　そめる。
アマネ「なんですか、その顔。何か言いたいことでも」
エ　ス「ままごとに付き合ってあげたい気持ちはやまやまなんだ
　がな」
　　薄く笑ったのちに、威圧するように言葉のトーンを
　　下げるエス。
エ　ス「いいか、アマネ」

アマネ「なんでしょう」

エ　ス「勘違いするな。お前は囚人で僕は看守だ。ここには明確な上下関係が存在する。お前に指図されるいわれはない」

エスの威圧にも一歩も引かないアマネ。

アマネ「ふむ、お言葉ですがあなたが看守だというならば、囚人の規範にならねばいけないのでは？」

エ　ス「笑わせるな。僕はお前たちの学校の先生ではない。お前らを矯正して正しい道を歩かせることが目的ではない」

アマネ「……」

エ　ス「ミルグラムはお前らを真人間にして社会復帰させることがゴールの空間ではない。必要なのはまじりっけなしの純粋な観察と、判断だ」

アマネ「観察と、判断……」

エ　ス「必要なのはお前の罪を赦すか、赦さないかだけだ、それ以上の責任は負うのは仕事の範疇外だ。僕はお前が小さな子供だろうと、そこを曲げるつもりはないね」

エスの言葉に少し、納得した様子のアマネ。

アマネ「……なるほど。そう、ですか……」
エ　ス「そういうことだ。じゃあ尋問を――」
アマネ「では看守としてではなく、あなたとして私に謝ってください」
エス「……。僕、として」
　アマネの言葉にはっとした様子のエス。
アマネ「そう、ひとりの人間として。約束を違えたら謝る。当然のことです」
エス「………」
アマネ「なんですか、呆けた顔をして。あなたは人間ではないのですか」
エス「……いや、きっとそうだな」
　眉間の力が抜けたエス。まっすぐにアマネを見つめる。
エ　ス「悪かったな」
アマネ「はい。私は優しいので、許しましょう。……よかったですね、私の両親相手だったらあと1時間はお説教を受け

ていますよ」

エス「お前の家に産まれないでよかったよ」

アマネ「……そうですか」

エスの軽口に少し悲しげなアマネ。

空気を切り替えるように、わざとらしく椅子に座り直す。

アマネ「さ、遅くなりましたし、尋問を始めましょうか」

エス「それは僕のセリフだけどな」

アマネ「桃瀬遍(モモセアマネ)12歳です。小学6年生です」

エス「まったく、その歳で堂々としたものだな。大人でもこの環境に恐れを感じているというのに」

苦笑いするエスにキョトンとするアマネ。

アマネ「え？ 全然怖くないですよ？ 私のことはかみさまが護ってくれていますから」

エス「そういうところは子供なんだな……」

アマネ「たしかにこれは突飛な出来事です。しかし、私は試練みたいなものなのだと認識しています。きっと、乗り越え

たときに私はもうひとつ成長できるのだと思います」

エス「……殊勝な心がけだこと」

アマネ「あとなんでしょう。特技は早寝早起き、趣味は勉強、得意な教科は国語です。野菜が好きで、牛豚鶏などの肉類は食べられません。……他に何か聞きたいことはありますか？」

アマネの子供らしい物言いに、少し口元に指を当て考え込むエス。

エス「……」

アマネ「看守さん？　何をぼーっとしているのですか。職務怠慢ですか」

エス「お前も……ヒトゴロシなのだなと思ってな」

アマネ「は……？」

エスの言葉にアマネの声のトーンが下がる。

アマネ「その質問はどういう意味でしょうか？　あなたがそういって、私たちを集めてきたのではないですか？」

エス「言葉通りの意味だ。少し言葉使いが大仰ということを除

けば、お前は普通の小学生に見える」

アマネ「言葉使いは、そうですね。教育と環境のおかげでしょうか……それで？」

エ　ス「とてもヒトゴロシには見えない」

アマネが呆れたような馬鹿にしたような、薄い笑いを浮かべる。

アマネ「……なるほど。それは外見や年齢ということですかね」

エス「そうかも、しれないな」

アマネ「……看守さんは、子供であれば人を殺さないとお思いですか？」

エス「そういうわけではない」

アマネの静かな怒りに気づかないエスは、なんの気なしに言葉を続ける。

エ　ス「ミルグラムが選んできた以上、囚人が人の死に関わっていることには間違いない。それは前提だ。それが覆ればすべて意味のないことになってしまう」

アマネ「では、なんでしょう。子供は普通、人を殺さないですか？

アマネ「子供であれば人を殺したことに何か事情があるかもしれないですか？　だから赦すべきとでも思っていますか？」

エス「そこまで言ってはいない。ただ、少なくとも日本の法律ではそうなっている。刑事責任年齢に達していないとされる」

アマネ「不服ですね。まるで子どもであれば、自我が未熟であると決めつけたような言い草です」

エス「……幼少期は親の教育の影響が強いのは事実だろう。成人に比べて、自我が未発達であるという側面は否めない」

アマネ「なるほど」

　エスの物言いに、椅子から立ち上がり少し大げさな身振りと手振りで答えるアマネ。

アマネ「では12歳の私が考えていることは不完全なのでしょうか？　今私が確かに感じている想いは、短い人生なりに培った価値観は、年齢を理由に切り捨てられる、取るに足らないものなのでしょうか？」

エス「………」

アマネ「12歳の私に自我はありませんか？　それでは16歳のムウさんには少しだけ自我があり、18歳のユノさんには自我があり、20歳のフータさんは完全に自我が確立していますか」

エス「アマネ……」

アマネ「仮に、仮にですが。私が誰かを殺したいほど憎いという気持ちを持ったとして、それを自分の意思ではないと軽んじられることほど屈辱的なことはないと感じます」

エ　ス「……」

言葉の出ないエスを見て、ニコリと笑うアマネ。

アマネ「あなたは先程、私を子供扱いしない、と言いましたね。しかし、年齢を理由に私が自ら人を殺しそうにないと感じる時点で、私を子供扱いしているのです」

エスに近寄り、見上げるアマネ。

アマネ「子供だからって油断してると、殺されますよ」

エスとアマネの間に沈黙が流れる。エスは軽くため息をつくと口を開く。

エ　ス「……感想を言っていいか」

アマネ「どうぞ」

エ　ス「大人だろうと子供だろうと、お前は立派にめんどくさいよ」

アマネ「おっと……お褒めにあずかり光栄です」

エ　ス「言ってろ」

　鼻で笑うエス。二人の間の空気がゆるむ。

エ　ス「ま……屁理屈だが、理屈は通っている。法律が便宜上ラインを引く必要性は理解しているが、僕までそれに感覚を引っ張られる必要はない、か」

アマネ「柔軟ですね」

エ　ス「それに……子供扱いされる腹立たしさはつい最近身をもって知ったしな。今思い出しても腹が立つ……」

　シドウのことを思い出し、ぼやくエス。

エ　ス「ミルグラムらしくないことをした。お前をきちんと罪深いヒトゴロシとして扱おう、囚人番号8番アマネ」

アマネ「はい、それはそれは。ありがとうございま……ん？　ん

ん……」

アマネの笑顔が曇り、複雑そうな顔。

それを見て、うんざりした顔のエス。

エス「……なんだ、まだクレームがあるのか」

アマネ「う〜ん、ヒトゴロシ……ですか」

エス「あーもう、なんなんだお前は。お前がそう扱えといっただろう」

アマネ「いいえ、12歳だから人を殺さないという考えが間違っているというのと、私がヒトゴロシ呼ばわりされるのが不服だというのは別の問題です。私は感情と論理は別で扱えますから」

エス「はいはい、大層なことだ」

座り直すエス。尋問モードで襟を正す。

エス「……では、あくまでヒトゴロシであることは認めていないと」

アマネ「う〜〜ん……」

アマネは考えながら、言葉を紡ぎ始める。

アマネ「人を殺した、と言われればそうなのかもしれません……
　　　しかし、間違ったことをしたとは思っていません」
エ　ス「ふん。それはお前が決めることではない。ミルグラムに
　　　おいては僕が決める。僕が間違いだといえば、間違いだ」
アマネ「あれを間違っていると言うのならば、私はあなたの方が
　　　間違っていると思います」
エ　ス「……なるほど。しかし、ミルグラムにおいてはともかく、
　　　ヒトゴロシは法律上の罪であることは間違いないだろう。
　　　それでも間違ったことをしていないと」
アマネ「ふむ。罪、といいますが今看守さんが行っている行為も
　　　犯罪なのではないですか？　まぁ私は法律よりも大事な
　　　ものがあると思いますのでそれで看守さんを軽蔑したり
　　　はしませんよ」
エ　ス「まったく、口の減らない……」
　　　アマネは楽しそうに笑いながら、言葉を続ける。
アマネ「ですから！ 私はミルグラムのこと嫌いではありません。
　　　一辺倒の法律よりも、別の基準で罪を判断する。それは

エス「ほう」

アマネ「私の善悪の基準は別のところにあります！　私の胸の中に、血液に、ＤＮＡに！　しっかりと刻まれています！」

エス「ではその基準の中では、お前のヒトゴロシは罪ではない、と」

アマネ「はい！」

エ　ス「なるほどね……」

　アマネの語気が更に荒くなり、興奮を孕んでいく。

アマネ「ああ……私は楽しみにしています。あなたの判断が、私の善悪の基準と一致するのか。そうすれば、外の世界よりも、ミルグラムこそが我々にとって正しい世界なのかもしれません！　ミルグラムはあなたの判断で決まるのでしょう！　もしかするとあなたは正しい世界の理解者なのかもしれない！」

エ　ス「……一致しなければどうする」

エスの問いに、

アマネ「お前を否定してやる」

先程までの熱気が嘘のように冷めた言葉で返すアマネ。息をのむエス。

エ　ス「……！」

突如部屋にある時計から鐘の音が鳴り、尋問室の部屋の構造が変化していく。

アマネ「おや、もう終わりですか？楽しい時間でした……。多少のすれちがいはありましたが、あなたは私に向き合って話をしてくれます。それはとても嬉しいことです」

エ　ス「……」

アマネ「あなたは私たちの理解者になってくれるかもしれない。そんな予感に満ちた素敵な時――」

言いかけたアマネのそばにある椅子を蹴りつけるエス。ガシャンと勢いよく壁にぶつかる。

アマネ「え？」

エ　ス「黙れよ」

09

アマネ「………」

アマネを冷ややかな目で見つめるエス。

エ　ス「覚悟しろよ、囚人番号8番」

アマネ「看守、さん……?」

エ　ス「お前が求めたのは、ミルグラムとの真っ向勝負だ」

アマネ「………」

エ　ス「黙って聞いてればべらべらと勝手なことを。基準を作るの僕だ。お前じゃない……思い上がるな。神様気分か」

ガンと壁にアマネをおしつけるエス。

アマネ「ぐっ……！　どうしました、暴力ですか」

エ　ス「どうした?　ただ抑えつけてるだけだぞ。動けないのか?」

アマネ「……くっ……うっ……」

エ　ス「子供じゃないんだろ?」

アマネ「っ！　何を！」

エ　ス「すまないな、僕の覚悟が足りなかったようだ。お前の言葉通り、すべてフラットに見てやるよ。子供扱いもしな

い。きちんとお前を見つめてやる」
アマネ「……う、う……！」
もがくアマネを見て、ニヤリと笑うエス。ぼそりとつぶやく。
エス「――するなよ」
アマネ「え、今……なんと」
エス「手遅れになってから、子供だからと言い訳するなよ」
アマネ「……私をっ！　侮辱するつもりですか！」
エス「囚人番号8番、アマネ。さぁ。お前の罪を歌え!!」

# 09

1

ミルグラム監獄内　尋問室

薄暗い尋問室。
尋問室でミコトが椅子に座っている、足をぶらつかせ、暇そうな態度。
ふと、深い溜め息をつき、

ミコト「はぁ～～」

思わず、天を仰ぐ。

ミコト「……こんなとこで何やってんだろ、僕」
エス「本当にな」
ミコト「うわっ！」
エ　ス「ま、それを明らかにするのもミルグラムの仕事だ」

いつの間にか尋問室の扉は開いており、エスがじっとミコトを見ている。
驚いて椅子ごと倒れ込みそうになったミコト、あわてて、

ミコト「ちょっと！　びっくりさせないでよ、看守くん。ドアを

開ける時はノックするってそこそこ常識じゃない？」
エ　ス「うるさい、指図するな」
ミコト「横暴なんだけど!?」
ミコトの言葉に取り合わず、エスは向かいの椅子に座る。偉そうに足を組む。
エ　ス「尋問を始めるぞ、囚人番号9番、ミコト」
ミコト「いやいや、尋問って言われても……別に何も隠してることなんてないってば」
エ　ス「名前、年齢」
ミコト「えーっと、榧野尊（カヤノミコト）23歳……じゃなくてさ、僕はずーっと君に話があったんだよ看守くん」
エ　ス「なんだ？　手短に済ませろ」
ミコト「ねぇ、いつ終わるのこれ？」
エ　ス「はぁ？」
ミコトの質問が想定外だったエス、怪訝な顔。それを見てヒートアップするミコト。
ミコト「いや！　そりゃそうでしょ！　急にこんな所に連れてこ

られてさ！　ヒトゴロシだのなんだの訳わからないこと言われて……なにかのドッキリとか？　リアリティショーとか？　モニタリングされてる的な!?　そう思って我慢してたんだけど!?　だからこそ、他の皆とも仲良くやってんだけどさ！　テレビだとしたら映りとか気を使うじゃん!?　でも、でもさ！　あまりにも長すぎる！　なんなのこれ！」

エ　ス「はぁ……お前まだそんなこと思っていたのか？　ミルグラムが、何かの冗談だと」

ミコト「思ってるよ……思ってるに決まってるだろ！」

　鼻息荒いミコト、少しずつ息を落ち着けると、しゅんとした表情を見せる。

ミコト「……だって、僕は本当に身に覚えがないんだ。罪を犯したとか、ヒトゴロシとか言われても、知らないよ……僕はただのしがない会社員だし……」

エ　ス「ふぅん……」

ミコト「……なんだよ、人が真剣に話してるってのに、ニヤニヤ

して」

エ　ス「……考えてみれば初めてだと思ってな。『まったく身に覚えがない』としらばっくれる囚人は……」

ミコト「しらばっくれてないって！　マジで！　マジで知らない！　ほら、僕の目見て！　ほら！」

ミコト、エスの肩を持ち正対させ、まじまじと瞳を見つめる。

エス「さわるな、馴れ馴れしい」

ミコト「いいから、ちゃんとこっちを見てよ！」

エス「……ふーん」

ミコト「どう？　マジでしょ」

エ　ス「知るか。『嘘をついているような目に見えない』とでも言われることを期待したか。僕はそんな曖昧なもので判断はしない」

進まない話に、苛立つミコト。エスの肩にかけた手を離す。

ミコト「だー、もう……ん？　いや、待ってくれ。そもそも僕が

何をしたか看守くんも知らないんだろ？」

エロス「あぁ、まったく知らない」

ミコト「なんだよ、それ！　それで僕をヒトゴロシだと決めつけるなんて横暴じゃない？」

エロス「横暴ではない。ミルグラムがそう言っている。僕にはそれで十分だ」

ミコト「なんで盲目的にそれを信じられるんだよ。話にならないよ……」

エ　ス「……」

ミコト「とにかく僕は本当に知らない。人も殺してない。悪いこともしてない。コツコツ普通に人生やってきただけ。それなのにこんな変なことに巻き込まれるなんてさ！」

イライラが募るミコト、思わず椅子から立ち上がる。

同時に振り上げた拳を、ゆっくり下ろす。

ミコト「……そんなの冗談だって、思いたいよ……思いたいだろ、こんなの……」

エロス「ふむ」

ミコト「僕にだって生活があるんだよ、苦労して憧れの会社入ったばかりなんだよ……クビになったら責任取ってもらうからな……」

エス「……なるほどね。面白い」

ミコト「面白いことがあるもんか」

心底面白げにニヤつくエス。

わざとらしくパンと手を叩く。

エス「よし、一旦その前提で話に付き合ってやる。……思考実験だ。ミコト、お前は何もしていない」

ミコト「そう！　そのとおりだよ、看守くん！」

エス「一旦な。一旦お前は囚人番号9番ミコトではないとしよう。そうだな、ただのミコトくんだ」

ミコト「いいね、ミコトくんでいこう！　僕も親愛をこめてスーくんって呼ぶよ」

エス「それはいらん。調子に乗るな」

ミコト「ええ……」

ミコトに近づき、見上げるようににらみつけるエス。

エ　ス「付き合ってやるかわりに一旦僕の言っていることを事実だと飲みこめ、ミルグラムはショーなどではなく現実だ」
ミコト「ううん……えっと、ここがヒトゴロシを集めている施設ってこととか？　それを歌と映像で云々とか？」
エ　ス「そうだ。お前の言うことだけを信じるならば、お前以外の9人は全員ヒトゴロシだ」
ミコト「そんな場所にいるのヤバすぎるでしょ。みんな全然そんな人たちに見えないし……ほら、そもそも小学生いるんだよ？」
ミコトの言葉に眉をひそめるエス。
エ　ス「……それはアマネにあまり言わないほうがいいぞ。めんどくさいことになる」
ミコト「ん？　なんで？」
エ　ス「まぁ、お前の言うことはわからないでもない。僕も尋問していて学んだ。人の印象はどうしても外見に引っ張られる」
ミコト「でしょ〜？　ゆんちゃんとか、むっちゃんとかただのJ

Kじゃん。ハルくんなんて虫も殺せなさそうな顔してるし、フータなんて傘パクんのがやっとでしょ。ほら、マッピーはただの良い人だし。ま、カズさんとかシドウさんとか……ま、あとコトちゃんとかは雰囲気的にワンチャンあるかもだけど」

エ　ス「……人物評参考にするよ、ミコトくん。ただ、そいつらはミルグラムが選んだ人間だ。間違いなく人の死に関わっている」

ミコト「うーん……まぁ、まぁいいや。一旦信じる」
　苦い顔で受け止めるミコト。
　エスがびしっと指をさす。

エ　ス「では。そんなところに無実のミコトくんが選ばれた理由はなんだと思う?」

ミコト「んー……人違い」

エ　ス「ほう?」

ミコト「そっち側の判断基準の細かいとこに目をつぶるとすると……同姓同名だとか、外見が似てるとか、そういう取り。

間違え」

エス「ミルグラムの誤作動ということか？」

ミコト「そうそう、他に考えようがないもん」

エス「そうか？　僕はもうひとつ思い浮かんでいるぞ」

ミコトの顔を覗き込むエス。

エス「お前は人を殺したことを忘れている」

エスの言葉に目を丸くするミコト。

ミコト「は？　忘れている？　人を殺したことを？　そんなことありえる？」

エス「お前が嘘をついていない。ミルグラムは正しい。両方の条件をのめば、この答えが導き出されるのは、自然だろう」

ミコト「忘れている……僕が？　人を殺したことを……？」

エス「人間はストレスを避けるために記憶に蓋をすることもあるという。解離性健忘のように」

ミコト「……ス、ストレス？　いやいや、まさか知らないうちに人を殺してるなんて、そんなことあるわけ……」

エス「……お前の発言を僕が信じてやるには、この線で考える

以外ないね。僕はお前のこと以上に、ミルグラムを信じ
ているからな。そこを疑うことはありえない」

ミコト「……いや……いやいや」

エ　ス「看守として、断言しよう。お前は、ヒトゴロシだ」

ミコト「ちょっと待って。ないないタンマタンマ……頭おかしく
なるって……やめてよ。嫌なことばかり……言うの……」

イラつきで頭をがしがしとかくミコト。

その様子を見て、エスがふぅと息をつく。

ミコト「知らないうちに……殺人犯になってんの……はは、ない
ない……」

エ　ス「ふん、時間をやる。記憶の糸を手繰るがいいさ」

ミコト「……うぅ……うう」

声にならない声でうめくミコトに、背を向けカツカ
ツと離れていくエス。

エ　ス「人を殺した記憶がない殺人者……だとすれば……どう考
えるべきか……」

独り言を呟きながら、部屋の中を歩き回るエス。

エ　ス「なぁ、ミコ――」
ミコト「あああああああああ！！」
エ　ス「!?」
　ミコトが椅子でエスを殴りつける。軽いエスは吹き飛び、壁に叩きつけられる。
ミコト「あーーーっ！！！」
　ミコトは続けざまに力まかせに椅子を投げつけ、大きな物音が立つ。
エ　ス「ぐあっ！　なっ……何が、ミ、コト……!?」
ミコト「ふっ……ふぅう……ふう……！！」
　状況のつかめないエス。
　目の血走ったミコト、息が荒く別人のよう。
エ　ス「げほっ……ぼ、僕に攻撃を……!?　ま、まさか、ありえない……」
ミコト「ああああっ!!　クソ！　クソが！　いらつかせんな!!」
エ　ス「囚人から、看守への攻撃はできないはず!!」

ミコト「うるっせぇんだよ、てめぇ!!」

　　エスを思いきり踏みつけるミコト。

エス「うあっ!!　ぐっ……!」

ミコト「ゴチャゴチャ言ってっと、叩き殺してやるぞカスが!!」

エス「ぐっ……!　ぐうっ……!!」

　　何度も何度も踏みつける。

ミコト「だらだらだらだらぁ!　ガキのくせに偉そうに!　ざまぁねぇぜクソがっ!!」

エス「……っ……ろよ……」

ミコト「はぁ!?　聞こえねぇんだよ!!　てめぇただのガキじゃねぇか、ザコが!!」

エス「……覚えてろよ、ヒトゴロシが」

　　傷つけられ、口や鼻から血を流すも目の光が消えないエス。ミコトをにらみつける。

ミコト「はぁー?　は、はは、はははは。もっと痛いのが好みか」

　　ミコト、転がっている椅子を持ち上げる。ゆっくりと頭上に。

エース「くっ……」

ミコト「いいぜ、顔面潰してやるよ……」

エース「やって……みろよ……」

ミコト「望み通りやってやるよ！　おああああああああああ!!」

　　ミコトが椅子を振り下ろそうとした瞬間に、横から蹴りを入れられる。

コトコ「ふん！」

ミコト「がっ!?」

　　椅子ごと大きな物音を立てて倒れるミコト。頭を抱えながらよろよろと起き上がる。

ミコト「……っ。あぁあ!?なんだてめぇ!!」

エース「!?　お前……！」

コトコ「命拾いしたわね、看守さん」

エース「コトコ……何故……」

コトコ「話はあと」

エース「……!?」

ミコト「……どいつもこいつも……」

ミコトが飛びかかる。構えるコトコ。

ミコト「俺をいらつかせんなぁぁあ!!」

コトコ「……!」

ミコトの大ぶりの拳を、最低限の動きでよけるコトコ。

ミコト「くっ!おらぁ!ちょこまかすんなぁ!!」

コトコ「はっ!ふっ!……典型的な素人の動きだけど」

ミコト「だらぁ!!」

コトコ「っ……!」

ミコトの蹴りを受けたコトコが圧力で後ろに下がる。
想像以上の威力に怪訝な顔。

コトコ「……この打撃の重さ。彼の筋肉量からは想像もつかない……」

ミコト「しつけぇ、しつけぇ……あああ」

コトコ「長期戦はそこそこ面倒か」

ミコト「うあああああああ!!」

コトコ「すぅ……」

飛びかかってくるミコトに、コトコのハイキック一閃。
コトコ「ふんっ！」
ミコト「がっ……」
エ　ス「……は、ハイキック一撃……」
　糸が切れたようにドサッと倒れるミコト。
　パンパンと手を払うコトコ。
コトコ「ふう……感謝して。気絶で済ませといたわよ。大丈夫？　看守さん」
エ　ス「……げほっ……コトコ……お前……」
コトコ「なに」
エ　ス「……尋問で招集が掛かる前に勝手に忍び込むとは……」
コトコ「は？　まさか咎める気じゃないでしょうね。私が控えてなかったら死んでたのよ」
エ　ス「……何故、尋問室にいた」
コトコ「カヤノミコトの奇妙な行動に注目していたから。隣の部屋だから目につくのよ」

エ　ス「……何故、僕を助けた」
コトコ「あなたの存在は私にとっても利があるから」
エ　ス「説明になって、ない……」
コトコ「……そうね、そこら辺は私の番で答える。順番抜かしを
　　　するつもりはないから」
エ　ス「…………」
コトコ「郷に従うよ、今のところはね」
　　　問答がさっぱりとしているコトコ。エスはあきらめ
　　　てよろよろ立ちあがる。
エ　ス「いっ……くそ、ミコト……好き勝手痛めつけてくれや
　　　がって……」
コトコ「……看守さん、こっち見て」
　　　エスが返事をすると、コトコの拳が目の前に。
エ　ス「なんだ、コト……っ!?」
コトコ「ふーん、拳が途中で止まる。囚人からの攻撃は受け付け
　　　ないってのは本当ね。じゃあなんでカヤノミコトはあな
　　　たを殴れるの?」

エ　ス「……心臓に悪い……やめろ……だいたい僕が知りたいくらいだ、そんなの……」

突如部屋にある時計から鐘の音が鳴り、

尋問室の部屋の構造が変化していく。

エイス「くっ……時間だ。出ていけコトコ」

コトコ「心象を歌と映像にするのね、私は見ちゃいけないわけ？」

エイス「認められない、出ていけ」

コトコ「……ふーん。それにしても面白いことになったわね」

エイス「コトコ？」

コトコ「あなたもわかっているでしょう。先程の行動からカヤノミコトは解離性同一性障害、いわゆる二重人格の可能性がある。まぁ、まだ虚言・芝居の可能性も捨てられないけど」

エス「……」

コトコ「ねぇ、どう思う？　私は本物を見たことはないけれど、仮に彼が本物の多重人格者ならば別人格が犯した罪は、主人格が負うべきなのかしら」

エ　ス「コトコ!!」
コトコ「……」
エ　ス「それを考えるのは僕の仕事だ、囚人の、お前の仕事ではない。それが真実か、それが罪かどうかも含めて、僕とミルグラムだけに判断する権利がある」
コトコ「……ふふふ、はいはい」
不気味な笑いを浮かべながら、尋問室をあとにするコトコ。
コトコ「いいわ、任せる。じゃあ私はこれで」
エ　ス「おい」
コトコ「なに？」
エ　ス「……助けてくれて、ありがとう」
コトコ「どういたしまして」
コトコの背中を見送り、寝ているミコトに向き直るエス。
エ　ス「……ふぅ。わけのわからないことばかりだ……だが、仕事はしなければならないな」

# 10

思い切りミコトを踏みつけるエス。
エ　ス「……ふん！」
飛び起きるミコト。
ミコト「いってぇ!!」
状況のつかめていないミコトを、怪訝な顔で見つめるエス。
エ　ス「……」
ミコト「何、何すんの看守くん!?　なんで僕いつのまに、あっ……なんだこれ、頭いてぇ……」
エ　ス「……だろうな」
ミコト「うー……て、てか！　看守くんも傷だらけじゃん!?　どうした？　何があったの？」
エ　ス「……何も覚えてないんだな」
ミコト「え、何、なんのこと……」
エ　ス「さんざん散らかしておいて、なんとも腹の立つ……だが、いいだろう。その態度、挑戦状と受け取ったよ」
口元から流れる血を拭い、ニヤリと笑う。

エ　ス「お前からなのか、もしくはお前以外の誰かからなのかは、
　知らんがな」
ミコト「だ、だから、なんのこと!?」
エス「囚人番号9番、ミコト。さぁ。お前の罪を歌え」

# 10

1

ミルグラム監獄内　尋問室

　薄暗い尋問室。

　尋問室でコトコが椅子に座っている。足を組み、堂々とした様子。

コトコ「………」

　ギィっとドアが開く。

コトコ「随分遅かったね。待ちくたびれたわ」

エ　ス「……囚人番号10番、コトコ。尋問を始める」

コトコ「どうしたの？　仏頂面をして」

エ　ス「……その節はどうも」

コトコ「ふっ、お礼を言う顔じゃないわよ」

　早足でコトコの向かいの椅子に近づき、座るエス。

エ　ス「お前には山程訊きたいことがあるからな。ひとまず名前と年齢」

コトコ「杠琴子（ゆずりはことこ）。20歳。大学生で、自主休学中。あとは、そうね。現段階でこれ以上は自分のことについて話す気はないわ」

エ　ス「何?」
コトコ「そちらの手の内がわからない間はね」
　　コトコのまったく怖気づかない態度に、エスは眉をひそめる。
エ　ス「あぁ? 一体どういうことだ」
コトコ「その前に、最終確認。ミルグラム……ここにいる全員がヒトゴロシというのは確かなの?」
エ　ス「あぁ、ミルグラムはお前たち10人をヒトゴロシだと言っている。ミルグラムの前提ルールだ。揺るがない」
コトコ「……ふぅん」
エ　ス「それがどうかしたか?」
コトコ「看守であるあなたも、これをさせている存在の意思をはっきりとは知らないのね」
エ　ス「何が言いたい……」
コトコ「ミルグラムが言っている——看守さん、嘘がつけないタイプね……もしくは迷いがあるのか。ま、誠実で好ましいと思うよ」

エス「……何様だ、貴様」

コトコ「命の恩人様かな」

エス「くっ……」

　得意げなコトコ。

エス「そもそもお前、何故あのとき尋問室にいた。助けられたのは事実だが。勝手な行動を許した覚えはないぞ」

コトコ「そうかしら。ミルグラムはそういう風にデザインされているように見えるけど？」

エス「デザイン……。囚人の、勝手な行動を赦すように……」

コトコ「看守さんがしているんでしょう？　鍵だってかかっていなかったわよ」

エス「……僕が……？」

コトコ「私がカヤノミコトの行動を疑い、注意深く動向を追うような人間であることも、許容したのはあなたでしょ」

エス「……人間性の観察……赦す・赦さないが確定するまで……」

コトコ「そういうことでしょ？」

コトコの言葉に上の空のエス。耳鳴り。いつもと雰囲気が違う。

エ　ス「なぜ……そんなことを……彼らが喋っているところを見たいから……、彼らのことをもっと、知りたいから……？」

コトコ「看守さん？」

エ　ス「看守……？　僕は……、(わ)たしは……」

ダンと床を踏み鳴らすコトコ。

エ　ス「……っ」

コトコ「ぼーっとしないでくれる？　尋問の途中でしょ」

エイス「……あ、あぁ」

コトコ「ま、終わりなら終わりでいいわ。私からも話があるし」

エ　ス「……？」

意識が戻ってきたものの、まだ朦朧としているエス。

その顔を見たコトコがニヤリと笑う。

コトコ「看守さん……いや、エス。私と協力しない？　私達は良いパートナーになれるはずよ」

エス「……協力……だと？」

コトコ「あなたは看守の立場から尋問によって得た情報を、私は囚人の立場から普段の監獄生活で得た情報を、互いに共有しあう。どうかしら？」

エス「……ふざけるな」

コトコ「どうして？　悪い話じゃないはずだけど。ほら、カヤノミコトの件は、そのお試しサービスだと思って」

エス「うるさい、黙れ。クーリングオフだ」

おどけるコトコに、取り合わないエス。

エス「僕は看守で、お前は囚人。以上だ」

コトコ「ふぅん……見た目通り、頭が固いな」

エス「なんだと？」

怒りをあらわにするエスに取り合わないコトコ。

ゆっくりと話し始める。

コトコ「……サクライハルカは、行動に積極性が増している。幼稚で偏執的だが、周囲とのコミュニケーションに興味を持ち始めたようだ」

エ　ス「……？」

コトコ「カシキユノは表面上の変化は少ないが、相手に同調するコミュニケーションが減ったように思える。本来のカシキユノが表出しはじめていると言うべきか」

エ　ス「……おい、何の話だ」

コトコ「カジヤマフータは明確に変わった。他人への攻撃的な言動が減少傾向にあり、自己正当化、防衛をする言動が増えて――」

エ　ス「コトコ！」

コトコ「……エスとの尋問を終えた囚人の行動の傾向が、徐々に変化していることに気づいている？」

エ　ス「……………知らん」

コトコ「監獄の中から見える景色もある。私はあなた同様、囚人を監視しているから」

エ　ス「……お前が何故そんなことをする必要がある！」

コトコの語調がひときわ優しくなる。

懐柔しようとする雰囲気。

コトコ「……協力しましょう、エス。私たちの利害は一致している」

エス「利害の一致だと。看守の僕と、囚人のお前が……？」

コトコ「そう……ここに収監されてから、私なりにミルグラムを観察し、考察した」

エス「それが囚人のやることか……」

コトコ「結果、私の中で出た仮説。ここはシンの善悪を定義する場所。ちなみに、ここでいうシンとは新しいという意味でもあり、まことという意味でもある」

エス「シンの善悪……」

コトコ「既に世界には法律という罪の基準が存在するにも関わらず、何故ヒトゴロシを集めて有罪無罪を改めて問う必要があるのか？ 囚人といいながら拘束すらせずに自由に行動させ、その者の人間性を観察しているのか？ 人の心を覗き、判断する必要があるのか？」

エス「………」

コトコ「こんなことをしようとするのは、今の善悪の定義が不完全だと思っている人間の仕業としか思えない」

エ　ス「……たしかにミルグラムは法律を基準としていない……
僕もそうだ……、新たな基準を、探している……」
うつろながら、こぼれたエスの言葉にコトコは微
笑む。
コトコ「気が合うね」
エ　ス「……ミルグラム自体へ、ここまで理解を示そうとする人
間は初めてだ」
コトコ「たしかに信じがたい非現実な場所よね。でも私にとって
は悪くない。手間が省けるというもの」
エ　ス「……？　コトコ、貴様は一体何を考えている」
コトコ「あなたと、同じだと思いたいけどね。……私は悪が赦せ
ない」
エ　ス「悪が赦せない、だと」
コトコ「そう。私は悪を憎んでいる——罪なきものを傷つける暴
力、略奪、殺人、悪業のすべてを憎んでいる」
コトコの握る拳がわずかに震え、怒りを静かに押し
殺している。

コトコ「この世には法で裁けない悪が多すぎる。法の隙間を縫い、弱者を虐げておきながら、今ものうのうと暮らしている悪人がたくさんいる。この世界を変えたいと思いながらも、私一人の力では限界がある……」

エス「……コトコ」

コトコ「あなたたちの真意は知らないわ。同じ思想を持つ同志というのも、もしかしたら私の妄想に過ぎないかもしれない。だとしても、善悪を再度多角的な観点で炙り出す……ミルグラムの性質自体に私は魅力を感じているのよ」

エス「……」

コトコ「どう？ 私のことを理解してもらえた？」

プレゼンを終えたあとのように、得意げなコトコ。

エス「……」

思案顔のエス。

エス「……ひとついいか」

コトコ「何？」

エス「……コトコ、お前はヒトゴロシだ」

コトコ「……」

エイス「お前もミルグラムの囚人だ。れっきとしたヒトゴロシだ。お前も、お前自身が憎む悪だ。裁かれる立場だということを忘れるな」

コトコ「……はぁ」

コトコが心底、拍子抜けした表情を見せる。

コトコ「ヒトゴロシ、ねぇ。あなたもそのレベルの人間？　がっかりさせないで。まぁどうでもいいけどさ」

エス「なんだと？」

コトコ「確かに私は人を殺した。だからこそミルグラムの力を信じることができた。でも、それは虐げられていた弱者を守るため。相手は極悪人。弱者の盾となり、牙となった結果。今のエスのように非難する人間がいたとしても、私は自分の行いに後悔はない」

エス「——殺人、その行為自体に善悪が備わっているわけではないと？」

コトコ「極端にいうとね。弱者を守るためなら致し方ないときもある。それに私が行ったのは……」

思案顔のエスに、コトコが得意げに笑う。

コトコ「『急迫不正の侵害に対して、自己または他人の権利を防衛するため、やむをえずした行為』よ。意味がわかる？」

エス「……刑法36条1項、正当防衛」

コトコ「よく勉強してるわね。事実、私はその件では司法においても、正当防衛と判断されている」

エス「……それは日本の司法の判断であり、僕が、ミルグラムが赦す赦さないは関係がない」

コトコ「そうね、理解している。それにすら懐疑的なミルグラムのルールに乗っ取るし、支持する。でも私は自分が正しいと確信しているし、エスにもそれが伝わると思っているわ」

エス「……まったく、たいした自信だ」

コトコ「だってエス。あなたは私の心に触れるんでしょ。歌と映像によって」

エス「……そのとおりだ」

コトコ「じゃあ大丈夫。わかる人にはわかるから」

エイス「そこまでいうなら、見せてもらおう。お前の心を」
コトコが立ち上がり、エスに近づく。
コトコ「私の罪に触れて、赦せないと思うなら赦さなければいい。
赦すならば……そのときは……」
手を差し伸べるコトコ。握手を求める。
エイス「何だ、その手は？」
コトコ「握手。私たちは仲間よ」
エ　ス「……僕と……、仲間……？」
コトコ「そのときはエス、私はあなたの牙になろう」
エ　ス「……何を言って……」
突如部屋にある時計から鐘の音が鳴り、
尋問室の部屋の構造が変化していく。
エイス「………っ」
コトコ「もう時間？　まぁ、いいわ。話したいことは話したし」
エ　ス「何が仲間だ……、僕は……お前たちヒトゴロシの罪を、
裁くための……っ。看守だ！　お前と手を結ぶ必要など
ない！」

コトコ「エス。あなたは自分のことを処刑人とでも思っているの？」

エ　ス「……？」

コトコ「法で裁かれない悪人がいるといったでしょ？　逆もしかり、不完全な法で裁かれようとしている善人もいる。……あなたはそれを赦す立場でもある訳でしょう」

エ　ス「……！」

コトコ「あなたは悪を裁く処刑人ではない。赦されるべき殺人者を救うのもあなたなのよ」

エ　ス「あ……あぁ……ああっ」

コトコ「さぁ、エス。私の罪を聴くがいい」

エ　ス「……囚人番号10番、コトコ。お前の罪を……歌えっ……！」

薄れゆく意識の中、

コトコ「………ハッ」

怪しく笑うコトコ。